

フィリップ・キノー『芝居じゃない芝居』 *La Comédie sans comédie*

鈴木彩絵 塩谷優衣 高安理保 鈴木美穂 野池恵子

以下の翻訳は、各幕の担当者が用意した訳を、参加者が様々な角度から検討し、問題点を時間をかけて討議して、最終的に担当者がまとめた、その成果である。

作品について

高安理保

ジャンル：五幕韻文喜劇

初演：1655年（マレー座）

初版：1657年

出典：第三幕 セルバンテス『模範小説集』*Novelas ejemplares* より『ガラスの学士』*El licenciado Vidriera*、他

第四幕・第五幕 タッソ『エルサレム解放』*La Gerusalemme liberata*

フィリップ・キノー（Philippe Quinault）の4作目にあたる本作は、枠組みとなる喜劇の中に、田園劇『クロミール』*Clomire*、喜劇『ガラスの博士』*Le Docteur de verre*、悲劇『クロランド』*Clorinde*、機械仕掛けの悲喜劇『アルミードとルノー』*Armide et Renaud*の演目を含んでいる。劇中劇それ自体は手法としては当時すでに真新しいものではなかったが、異なるジャンルの作品を4つもひとつの作品中に収めたものは類を見ず、キノー自身も献辞でこれを「他とはまったく異なる」芝居だと銘打っている。この作品はコルネイユ『イリュージョン・コミック』*L'illusion comique*（1635年）やロトルー『真説聖ジュネ』*Le Véritable Saint Genest*（1645年）とは違い、枠劇と劇中劇の区別を明確にしており、構造としてはグジュノー（1631年）やスキュデリー（1632年）の『役者たちの芝居』*La Comédie des comédiens*に連なる「役者もの」の形を採っているが、枠劇を散文喜劇で、劇中劇を韻文悲喜劇で書き分けた両者に倣わず、全幕を通して韻文で綴っている。

世紀半ばに位置する本作は、先行する作品とは異なり、「演劇」それ自体を称揚する必要に迫られ

てはおらず、それを目的としていない。このことは、プロローグ的な役割を果たす一幕の枠劇で、芝居に偏見を持つブルジョワの商人が「旧世代」の人間として描かれ、若い世代の役者たちが演劇はすでに洗練されたものと彼に語り聞かせる状況からも伺える。作中で役者たちが演目を披露する目的はあくまで自分たちの結婚を認めてもらうことであり、その条件として、自分たちが役者という職業において発揮しうる資質、すなわち人々の称賛に値する才能を有することを、実際の演技によって知らしめなければならない。この条件はそのまま、劇団が作品を上演する動機に通ずる。

劇作家としてはもっぱらオテル・ド・ブルゴーニュ座のために仕事をしたキノーが、唯一マレー座のために書いたのがこの作品である。さまざまな困難に見舞われ解散や休止を何度も余儀なくされたマレー座が、1655年のイースター休暇明けの劇場再開の折に、劇団の復活をかけて上演する作品を、処女作『恋敵』（1653年）から一定の評判を得ていた若い作家に託した。キノーは、再出発を迎えたマレー座が演じることのできる豊富なレパートリーを知らしめ、かつても劇団が危機を切り抜ける活路となった仕掛け芝居を含めて、その巧みさを遺憾なく発揮できるようにこの作品を練り上げた。作中で「人々が私たちに満足するかどうか」の判断を下すただひとりの審判者として役者が呼びかける「あなた」（一幕5場）は、次幕以降ひとりの観客となる商人であり、劇場に座する観客のひとりひとりでもある。そして、役者たちに向けられる賛美はそのまま、作者であるキノーにも及ぶことになるだろう。実際に作品は成功し、キノーの華々しい作家人生の布石となるのだから、彼のキャリアにおいて最初期に位置するこの作品は、劇団のみならず作家の才能の多彩さを証しながら、彼自身のこれからの劇作のヴィジョンを進取的に掲げるものであったといえる⁽¹⁾。

舞台が描き出す景色は、田園から異国の街、古の戦場から魔法の島へと変遷するが、劇中劇の手法によって、場所は一幕が演じられる「パリ」からはみ出すことはない。時間についても同様のことがいえる。幕開けに描かれるのは夜の情景で、夜中、幕外で演目や配役が決められる。夜が明けるとすぐに試演が開始され（二幕1場）、一日のうちにすべての演目が終わる。役者たちは自らの恋心に従って行動し、最後にはめでたく結婚に至るのであるから、筋も一貫している。劇中劇はマレー座で上演されるのであり、この舞台設定は観客の現実と重なる。

謎めいたタイトルは、それ自体が作中に散りばめられた言葉遊びのひとつである。作者が意図するところを単純に訳出することは難しい。この解釈について、1974年にエクスター大学から作品の批評校訂版を出したビアールは、現代的視点から三幕『ガラスの博士』を笑劇（ファルス）と見做して劇中劇としての喜劇（コメディ）の書き落としそれ自体を以てタイトルを正当化し、「喜劇を含まない喜劇」だとするランカスターの説⁽²⁾に疑念を呈する。というのも、キノー自身が三幕に

(1) じつに、作家人生の後半を音楽家リュリの台本作家としてオペラに捧げるキノーが、その最後を飾ることになる『アルミード』*Armide*（1686年）の主題が、30年以上前に成るこの作品の五幕ですすでに現れている。

(2) Henry Carrington LANCASTER, *A History of French Dramatic Literature in the Seventeenth Century: The period of Molière, 1652-1672*, V.1, Baltimore: The John Hopkins Press, 1936, p.98.

「喜劇」Comédie と書き添えているように、当時この演目をファルスではなくコメディと見做すのはふつうのことであった⁽³⁾。ピアールは、コメディという語が広義には「仲間内でなされる、おどけて滑稽なあらゆる行為⁽⁴⁾」、また「どこかおどけていて、見せかけや誤魔化しがあるように思われる行為⁽⁵⁾」を指していたことに着目して、タイトルの意味するところは「嘘偽りない芝居」le théâtre sans mystification、あるいは「芝居そのもの」le théâtre tel qu'il est に換言できるものであろうと結論づける⁽⁶⁾。演劇に明るくなく先入観に囚われている人間に対して芝居とは何たるかを実演で示すという状況に合致した解釈であり、これに従えばかなり真摯な印象を与えるタイトルということになる。演劇はお遊びではなく大真面目な取り組みであると強調しているわけである。

しかしながら、先述した通り、作品の目的は「演劇」それ自体の擁護にはない。そこで、2019年にクラシック・ガルニエからキノー演劇全集の喜劇編を出したコルニックは、作家が実際の芸名で俳優を登場させ、あくまでフィクションである物語を、劇団の実体を示唆する内容を織り混ぜながら描いていることに依拠して、キノーは現実と虚構の境界を曖昧にすることでコルネイユの『イリュージョン・コミック』に呼応する作品を生み出そうとしたものと考察し、タイトルの示すところは「イリュージョンではないミメシス（模倣芸術）」mimésis sans l'illusion、つまり「幻想を解かれたイリュージョン・コミック」« illusion comique » démystifiée であるという解釈を与える⁽⁷⁾。すなわち、キノーが作品全体を通して演劇のもたらすイリュージョンを解体しながら強調している、その演劇的効果をタイトルに表現しているのである。

実際の芸名で登場する5人のうち、オートロッシュとラ・ロックが役者という現実の職業を演じる一方で、ジョドレは召使い、ラ・フルールはブルジョワ、シュヴァリエはその息子と、普段彼らが役者として演じる一般的な役柄を演じている。また、アマント、シルヴァニール、ポリクセース

(3) COMEDIE. Pièce de théâtre composée avec art, en prose, ou en vers, pour représenter quelque action humaine ; & se dit en ce sens des pièces sérieuses, ou burlesques. [...] Comédie se dit [...] pour une farce, une facétie, où on n'introduit guères que des valets et des bouffons, pour dire des choses plaisantes et faire rire. [...] / FARCE a se dit aussi de ces petites facéties que donne les charlatans en place publique pour y amasser le monde, parce qu'elles sont remplies de plusieurs pointes & de mots de gueule. Les Comédiens en ont fait de plus régulières qui ont gardé le même nom chez le peuple, & qu'ils appellent plus honnêtement de Pièces, Comique (Antoine FURETIÈRE, *Dictionnaire universel, contenant généralement tous les mots François*, La Haye, Rotterdam : Arnout et Reinier Leers, 1690.)

(4) COMEDIE, se dit par extension de toute action plaisante, ou ridicule, qui se fait en compagnie (*Ibid.*)

(5) Comedie, [...] se dit aussi fig. Des actions qui ont quelque chose de plaisant, & qui semble estre une feinte (ACADÉMIE FRANÇAISE, *Dictionnaire de l'Académie française*, Paris : la Veuve de Jean Baptiste Coignard et Jean Baptiste Coignard, 1694.)

(6) Philippe QUINAULT, Jean Dominique BIARD, *La Comédie sans comédie*, Exeter : University of Exeter Press, 1974, p. VII-VIII.

(7) Philippe QUINAULT, Sylvain CORNIC, *Théâtre complet*, Paris : Classiques Garnier, 2019, Tome. II, p.351.

はヒロインの名として典型的で⁽⁸⁾、明らかに創作だとわかるものである。アマントとシルヴァニールの姉妹を演じた女優たちは実の姉妹だと推定されるが⁽⁹⁾、彼女たちにシュヴァリエとの血縁はなく、兄妹の関係はラ・フルールとシュヴァリエの親子関係と同様に作者の創作である。つまり、そうではないとタイトルが謳っていても、これは芝居なのだと観客ははっきりと認識できるのであって、むしろ逆説的に、観客は「これは紛れもなく芝居なのだ」という事実を意識せざるを得なくなる。芝居の中に現実が溶け込んでいるというべきか、はたまた現実の方が芝居に侵食されているのか。芝居だとわかっているのに、そのイリュージョンに魅了されずにはいられない。こうしたある種の心理的葛藤を、キノーは、「ラ・コメディ・サン・コメディ」という小気味良いテンポの短いフレーズで掻き立てる。この原題の語感を尊重して、日本語訳を『芝居じゃない芝居』とした。

作品の構造を俯瞰して見ると、ほぼ独立していて関連がないようであるそれぞれの劇中劇や粹劇の間に、緻密な連関が保たれていることがわかる。まず、召使いが演奏するテオルボと愛嬌のある歌で幕が開き、一幕で恋人たちが競わせる美しい二重唱を聴かせた後、リズム感の良い場面が各幕に配置され、最終幕でオーケストラの盛大な合奏が響く。音楽が全体を包み込む形になっており、作品に音楽的調和がもたらされている。

また、田園劇は後幕の展開を予感させる要素や場面を多く含んでいる。フィレーヌは五幕のルノーと同様に唐突な眠りに落ち（二幕7場—五幕5場）、怒りにまみれたドリーズと悲嘆に暮れるフィレーヌの対面は、クロランドとタンクレードの一騎打ちを予感させる（二幕8場—四幕1場）。ドリーズの男装は、クロランドやエルミーヌの武装に通じる。

そして、一幕で歌に現れた神話的世界観が、三幕の喜劇で狂人の目を通して再び出現し、五幕の機械仕掛けの非喜劇に至っては、神々がもはや概念としてではなく、実体を伴って登場する（一幕1場・3場～4場—三幕6場—五幕5場・7場・9場）。月と夜にまつわる女神、ディアヌ（一幕3場～4場）、プロゼルピーヌ（三幕6場）、ヘカター（五幕1場）の名が随所で呼びかけられることも、内容的には異質なこの3つの幕に呼応関係を生んでいる。

さらには、中央に位置する三幕において、博士の言葉で地獄の景色が描写されることが（6場）、作品全体と3幕との関係に対応して紋中紋（*mise en abyme*）の構造を作っている。三幕それ自体は、粹劇の現実に対して劇中劇が俳優や舞台装置を使って描き出す「作りもの」、フィクションであり、対して博士の幻覚は、三幕内の現実に対して狂気が出現させる「想像の世界」、ファンタジーなので

(8) タッソの田園劇『アミンタ』（1573年）のフランス語名がアマントである。デュルフェ（1625年）やメレ（1630年）は『シルヴァニール、あるいは生きている死者』*La Sylvanire ou la Morte-vive* と題した田園非喜劇を書いている。ポリクセーヌは、スキュデリーの悲喜劇『暴君の恋』*L'Amour tyrannique*（1638年）に登場するフリギアの王女の名になっている他、その名を冠した恋愛冒険小説も出ている。また、モリエールの『才女気取り』*Les Précieuses ridicules*（1659年）では、アマントとポリクセーヌがプレシューズたちのギリシア風のあだ名となっている。

(9) William BROOKS, *Philippe Quinault, dramatist*, Pieterlen and Bern : Peter Lang, 2009, p.66-67.

ある。両者に共通するのは、そこに実際に「在る」のは紛れもない「現実」だということ、また、フィクションやファンタジーの生じる要因が「愛」にある⁽¹⁰⁾ ことである。

じつに、この作品では、5つの物語すべてが「愛」のテーマで貫かれている。各演目において節々で名指され、その性質が語られてきた「愛」は、最終幕で神として出現し、クライマックスをもたらす。この結末は、劇中劇を枠劇に接続し、さらには現実の観客にも及ぶ効果を発揮する。すなわち、劇中劇を通じて徐々に驚異的な事象に対する心理的ハードルが解除された観客は、最終的に、自分たちの側に位置するひとりの登場人物の驚嘆を介して、愛の神の存在を身近に感じるに至るのである。驚異的な存在としての愛の神が、一連の筋の展開の結果、真実らしさを獲得しているといえる。そして、この「芝居」がもたらす驚くべき効果はけっして架空のものではない。演劇的效果それ自体は、「芝居」の世界でのみ実体を持つような魔術や神通力ではなく、実際の役者たちの演技によって、あるいは作家の筆によって、現実にもたらされるのである。

尚、エディションについてはキノーの存命中に出版されたものが全集を除いて4つあるが、翻訳に際しては、クラシック・ガルニエ版に倣い、初版の1657年版に基づきながら適宜註を加えた。

<引用・参考文献>

- *La Comédie sans Comédie*. Par le Sr Quinault. A Paris, chez Guillaume de Luyne, Libraire juré, au Palais, dans la salle des Merciers, à la Justice. MDCLVII. Avec Privilège du Roy.
- *La Comédie sans Comédie*. Par le Sr Quinault. Imprimée à Rouen, et se vend à Paris, chez Guillaume de Luyne, Libraire juré, au Palais, dans la salle des Merciers, à la Justice. MDCLX. Avec Privilège du Roy.
- QUINAULT Philippe, *Théâtre complet II*, Sylvain Cornic (éd.), Paris, Classiques Garnier, coll. « Bibliothèque du théâtre français », n° 62, 2019.
- QUINAULT Philippe, *La comédie sans comédie*, Paris, Guillaume de Luyne, 1657, Jean Dominique Biard (éd.), Exeter, University of Exeter, 1974.
- QUINAULT Philippe, *La comédie sans comédie*, Publié par Ernest, Gwénola et Paul Fièvre pour Théâtre-Classique.fr, Mars 2021(version PDF) ; < <http://www.theatre-classique.fr/> >
- ACADÉMIE FRANÇAISE, *Dictionnaire de l'Académie française*, Paris, la veuve de Jean-Baptiste

(10) 枠劇において役者たちが劇を上演する理由は恋人との結婚を父親に認めてもらうためであり、三幕で博士が地獄の幻覚を見るのは恋心あるいは結婚への不安から発狂したためである。また、三幕で金に目がくらみ娘の恋路を阻む父親（パンフィル）のキャラクターは、これを見てラ・フルールのそれと重なる。

- COIGNARD, 1694.
- FURETIÈRE Antoine, *Dictionnaire universel, contenant généralement tous les mots français*, La Haye, Rotterdam, Arnout & Reinier Leers, 1690.
 - RICHÉLET Pierre, *Dictionnaire français*, Genève, Jean Herman Widerhold, 1680.

 - BELY Lucien, *Dictionnaire de l'Ancien régime : royaume de France XVIe-XVIIIe siècle*, Paris, Presses universitaires de France, 1996.
 - BROOKS William, *Philippe Quinault, dramatiset*, Oxford ; New York, Peter Lang, coll. « Medieval and early modern French studies », n° 6, 2009.
 - CERVANTÈS Miguel de, *Le licencié Vidriera, nouvelle traduite en français avec une préface et des notes par Raymond Foulché-Delbosc*, Paris, H. Welter, 1892.
 - CONESA Gabriel (éd.), *Le salon et la scène : comédie et mondanité au XVIIe siècle*, Paris, Champion, coll. « Littératures classiques », n° 58, 2006.
 - CORNEILLE Thomas, *Le berger extravagant : pastorale burlesque*, Francis Bar (éd.), Genève, Droz, coll. « Textes littéraires français », n° 90, 1960.
 - CORNIC Sylvain et LA GORCE Jérôme de, *L'enchanteur désenchanté : Quinault et la naissance de l'opéra français*, Paris, PUPS, coll. « Lettres françaises », 2011.
 - DEIERKAUF-HOLSBOER Sophie Wilma, *Le theatre du Marais II*, Paris, Nizet, 1958.
 - FORESTIER Georges, *Le théâtre dans le théâtre sur la scène française du XVIIe siècle*, 2e éd. augm, Genève, Droz, coll. « Titre courant », n° 3, 1996.
 - FOURNEL Victor, *Les contemporains de Molière III*, sans lieu, Firmin Didot frères, fils et cie, 1875.
 - GROS Etienne, *Philippe Quinault, sa vie et son œuvre*, Paris, Librairie ancienne Honoré Champion, 1926.
 - LANCASTER Henry Carrington, *A History of French Dramatic Literature in the Seventeenth Century : The period of Molière, 1652-1672*, Baltimore, Johns Hopkins Press, 1936, 2 vol.
 - LECLERC Jean, *L'Antiquité travestie et la vogue du burlesque en France, 1643-1661*, Paris, Hermann, 2014.
 - LEMAZURIER Pierre-David, *Galerie historique des acteurs du théâtre français depuis 1600 jusqu'à nos jours*, Paris, J. Chaumerot, 1810, 2 vol.
 - LYONNET Henry, *Dictionnaire des comédiens français, ceux d'hier*, Genève, Bibliothèque de la Revue universelle internationale illustrée, 1910, 2 vol.
 - MARSAN Jules, *La Pastorale dramatique en France à la fin du XVIe et au commencement du XVIIe siècle*, Paris, Hachette et Cie, 1905.
 - MOREL Jacques, « Les satyres d'Amaryllis », *Cahiers Tristan L'Hermitte*, n° 13, 1991, p.33-35.
 - PASQUIER Pierre, SURGERS Anne et CAVAILLÉ Fabien (éd.), *La représentation théâtrale en France*

- au XVIIe siècle, Paris, Armand Colin, coll. « Lettres sup », 2011.
- SCHERER Jacques, *La dramaturgie classique en France*, Paris, Nizet, 1950.
 - TASSO Torquato, *La Jérusalem délivrée, poème du Tasse*, Charles François Le Brun (trad.), Paris, Ledentu, 1840.
 - TRISTAN L'HERMITE, *Ceuvres complètes V*, Roger Guichemerre (éd.), Paris, Honoré Champion, 1999.
 - VERDIER Anne, *Histoire et poétique de l'habit de théâtre en France au XVIIe siècle (1606-1680)*, Vijon, Lampsaque, coll. « Le Studiolo-essais », 2006.
 - VUILLERMOZ Marc, *Dictionnaire analytique des œuvres théâtrales françaises du XVIIe siècle*, Paris, Champion, 1998.
 - エイコス：17世紀フランス演劇研究会編『フランス17世紀演劇事典』、中央公論新社、2011.
 - タツソ（トルクァート）『愛神の戯れ－牧歌劇『アミンタ』－』鷺平京子訳、岩波書店、1987.
 - タツソ（トルクァート）『エルサレム解放』A. ジュリアーニ編、鷺平京子訳、岩波書店、2010.
 - ヒュギヌス『神話伝説集』五之治昌比呂訳、京都大学学術出版会、2021.
 - ベルフィオール（ジャン＝クロード）『ラルース ギリシア・ローマ神話大事典』小井戸光彦他訳、大修館書店、2020.
 - 松原國師『西洋古典学事典』、京都大学学術出版会、2010.
 - ラブレー（フランソワ）『パンタグリユエル』宮下志朗訳、筑摩書房、2006.
 - ラブレー（フランソワ）『第五の書』宮下志朗訳、筑摩書房、2012.
 - ルキアノス『ルキアノス選集』内田次信訳、国文社、1999.

『芝居じゃない芝居』 *La Comédie sans comédie*

第一幕

担当：鈴木彩絵

【解題】 4種類の「劇中劇」(théâtre dans le théâtre)を内包したハイブリッド型の戯曲『芝居じゃない芝居』の第一幕は、「枠劇」(pièce-cadre)として、劇全体のプロローグの役割を果たす。

この幕の第1の特徴は、恋愛を巡る虚構の筋立てのなかに、1655年初演当時のマレー座とそのメンバーたちが置かれていた現実の状況が織り交ぜられている点にある。第5場で、オートロッシュは、一座が少し前から解散状態にあることに言及し、ラ・ロックは、オートロッシュと共に心地よい休息を満喫している最中であると語る。『芝居じゃない芝居』の上演時期について明確な記録は残されていない。しかし、2人の証言をもとにある程度推定することはできる。コルネイユによる機械仕掛けの音楽悲劇『アンドロメード』*Andromède* (1650年)の再演が1655年のイースターで終了すると同時に、マレー劇団とボブレ率いる田舎劇団との業務提携契約が終了し、マレー劇団は事実

上解散した。劇団復活のための新メンバー集めに奔走するなか、座長のラ・ロックはオートロッシュに声を掛ける。オートロッシュは、1655年3月末日の自身が率いる田舎劇団の契約期間満了に伴い、翌4月1日に団員たちとパリに戻ってきていた。かくして、オートロッシュと彼の団員たち、シュヴァリエにラ・フルール、さらに、マレー座の財政的困窮によりしばらく劇団を離れていたジョドレ等も集結し、新編成のマレー劇団が誕生する。

一座が「少し前から」解散状態にあったというオートロッシュの台詞を信じるなら、ウィリアム・ブルックスが指摘するように（William Brooks, *Philippe Quinault, Dramatist*, p.64-65）、ラ・ロックの言う「休息」はイースター休暇を指していると考えるのが自然であり、『芝居じゃない芝居』は、イースター明けの演劇シーズンの再開を飾る作品であったとみなすことができるだろう。

幕の第2の特徴として挙げられるのは、歌曲の多用である。第1場は、オートロッシュの召使い役を演じるジョドレの愉快な弾き語りではじまる。第3場と第4場では、オートロッシュがカウンター・テナー、ラ・ロックの妹役のポリクセースがソプラノで、「新作の芝居のなかの数行」（第2場）を借用した恋人たちの愛のセレナードを、はじめは交互に、続いてデュエットで歌う。

歌詞にも工夫が凝らされている。ジョドレの歌は滑稽味を醸しながら、同時に神話的モチーフを併せもつ。オートロッシュたちのセレナードのなかでは、恋人の眼光が、月光よりも美しい輝きをもった星に喩えられる。ストーリー性と詩情を孕んだこのような歌曲は、粋劇と続く4つの劇中劇の間に統一性をもたらす。

最後の注目すべき特徴は、恋愛を巡る人物相関関係は虚構であっても、実名で登場する男性役者陣、とりわけラ・ロックは本人役として、自らを完璧に演じていることである。座長兼芝居の口上係である彼は、役のなかでも同様に口上係であり、第5場終盤では、自分たちが翌日演じようとしている田園劇（第二幕）、喜劇（第三幕）、悲劇（第四幕）、悲喜劇（第五幕）の告知を行う。

粋劇（第一幕）の目的は、まさにこの告知の実施にある。したがって、ラ・ロックは最も重要な役どころを担っているわけだが、奇妙なことに、幕全体を通して見ると、オートロッシュに比べて明らかに彼の影は薄い。両者が演じるのはいずれも、商人ラ・フルールの2人の娘に恋する役者の役である。しかし、第1場から存在感を示すオートロッシュに対し、ラ・ロックは、第3場冒頭からしか舞台上に登場しない。ラ・フルールを相手に演劇の素晴らしさを説く第5場でも、ラ・フルールの演劇批判にすぐさま応酬するのはオートロッシュであり、ラ・ロックは、オートロッシュの主張を補完する役に徹する。現実の彼は、オートロッシュのように鮮やかな才能には恵まれなかったが、口上係を務めるに相応しい雄弁さと、金を払わず劇場内に押し入る暴徒たちを前に皆がひるむなか、ひとり立ち向かう勇敢さを持ち合わせていた。劇中人物としてのラ・ロックにも、普段は前には出ることはないが、最も大事な局面において頼りになる人となり反映されているといえるだろう。

このように、リアルと虚構が融和した第一幕は、単なる粋劇以上の価値を有している。

【あらすじ】 舞台役者のオートロッシュとラ・ロックは、裕福な商人ラ・フルールのふたりの娘、

アマントとシルヴァニールに、それぞれ恋をしている。ある夜、アマントにセレナードを捧げようと、召使いのジョドレを連れてラ・フルールの家の前までやってきたオートロッシュは、ラ・フルールの息子のシュヴァリエに見つかる。アマントへの想いを語るオートロッシュに対し、シュヴァリエもまた、舞踏会で出会った名前も知らない女性に恋をしていると告白する。

オートロッシュがセレナードを歌おうとすると、同じくシルヴァニールにセレナードを捧げようと、ラ・ロックが、妹のポリクセヌを連れて現れる。オートロッシュとポリクセヌによる歌唱が終わった直後、シュヴァリエは、ポリクセヌこそ自分が恋する女性であると気づき、歓喜する。

そこへ、ラ・フルールが帰ってくる。娘たちの恋人と鉢合わせしたラ・フルールは、シュヴァリエの説得によって怒りを鎮めるが、恋人たちの職業が役者だと知った途端、再び難色を示す。オートロッシュとラ・ロックは、芝居の素晴らしさをわかってもらおうと、田園劇、喜劇、悲劇、悲喜劇の4つの主題を演じてみせることを、ラ・フルールに提案する。

【一幕の登場人物】

ジョドレ Jodelet	オートロッシュの召使い
オートロッシュ Hauteroche	役者
シュヴァリエ Chevalier	ラ・フルールの息子
ラ・ロック La Roque	役者
ポリクセヌ Polixène	ラ・ロックの妹
アマント Aminte	ラ・フルールの娘
シルヴァニール Silvanire	アマントの姉
ラ・フルール La Fleur	商人

舞台はパリ

〈第1場〉 ジョドレ、オートロッシュ

ジョドレ⁽¹⁾ (かすかな光を放つランタンを地面に置いたあと、
テオルボ⁽²⁾を弾きながら歌う。)

(1) ジョドレは、繊細な演技と迫真の語りで、喜劇のジャンルにおいて高い名声を獲得した俳優である。舞台上に登場するや、無断で拝借した御主人様（オートロッシュ）の楽器を奏しながら可笑しい歌を披露し出す役どころには、姿を見せるだけで観客の笑いを誘った彼の愉快的な容顔や、語りに滑稽味を与える特徴的な鼻声が生きていたに違いない。

(2) 16世紀イタリアで発明された、低音弦を加えたリュート。

夜は、安らかな眠りをうんと
人々の上に降り注ぎながら、
喧噪に眠りを与え、悲しみにいびきをかかせる。
そして、太陽、あの大きなランタンは、
馬の速歩よりも速いスピードで
彼を客人として迎え入れる海の女神テティスのもとへとゆき、
深い眠りにつくのさ。
フーガは凝ってるし、和音も不味くないぞ。

オートロッシュ（傍白で）

歌っているのはおれの召使い。ああ、なんて厚かましいんだ。

ジョドレ

天使みたく歌いたい気分だなあ。

（彼は歌いつづける。）

その間、狼男と、
モリフクロウとミミズクに囲まれながら、
おいらは嫌々、ここで長いこと立ったまんま待ってるのさ。

（テオルポの弦が一本切れる。）

なんてこった、一番美しいところで弦が切れちゃうなんて。
ああ、しかも一番細い弦だ、こいつはとにかえしのつかないことになったぞ！
もしひょっこり御主人様が現れでもしたら、おいら不具にされちまう。
今夜、御主人様は、ぞっこんの色女にセレナードを歌うってのに。

オートロッシュ

このろくでなしめ！

ジョドレ

この御方が最初に仕掛けてくる気まぐれのおっかないことと言ったら。
おつむはえらく軽いが、腕はおそろしく重い。
悪魔のようにすばしこくて、耳が聞こえない輩みたいに派手にぶちかましてくるんだ。

オートロッシュ

このげす野郎をこてんぱんにしてやろう。

ジョドレ

泥棒だ！ 殺されるう！

〈第2場〉 シュヴァリエ、オートロッシュ、ジョドレ

シュヴァリエ（家から出てきて）

よく知っているジョドレの音がするぞ。

誰かがあいつを侮辱している、助けないと。

おまえ、どいつだか知らないが大人しくしろ。さもなくば、死ぬ準備をするがいい。

オートロッシュ

あなたの友人たちを見逃してください、どうぞ怒りをお納めに。

シュヴァリエ

君か、親愛なるオートロッシュ！ 許してくれ、頼む。

てっきり、誰か他のやつが君の召使いを侮辱していると思ったんだ。

ジョドレ

おいらたしかに、えらい待ちくたびれていやした。

弦が一本とんじまって、そのショックでおかしくなるか、死んじまいそうなんです。

オートロッシュ

裏切り者！

ジョドレ

まあまあ、落ち着いてくだせえ、おいらもっといい弦を張りますんでさ。

オートロッシュ

アリストのところで夕食をとったあと、思い切って、あなたに歌で「今晚は」の挨拶をしようと思
い、やって来たのです。

シュヴァリエ

その挨拶は、君が想いを寄せている僕の妹にやってくれるかな。

オートロッシュ

あなたにたいして私が抱いている友愛の情を、私は一度たりとて隠そうとしたことはありません。御存知でしょう、私が恋焦れていることも、あなたのお許しがなければ、自分の恋を明かすこともできず、ずっと悩み苦しんであろうことも。ですが、あなたのご厚意は、私の希望を無駄に築いているのです。運命は、私たちの間にあまりに大きな隔たりを置いています。あなたのお父上は非常に裕福ですから、財を大事とお考えになり、一舞台役者にたいして軽蔑の念を抱かれることでしょう。私は恐れているのです、お父上は囚われるのではないかと、私たちの役者という名が大衆の心に刻みつける、あの嫌悪の情に。私たち役者が持つ技術の価値をおわかりにならないがために、私たちの愛は、お父上から軽蔑の念しか得られないでしょう。

シュヴァリエ

君たちも知ってのとおり、父はいま、プロヴァンスで2艘の船を待っている。船の中には、僕たちの財とともに僕たちの希望のすべてがあるんだ。突風にいきり立った運命が、僕たちの間に再び平等を据える可能性だってある、ということもわかるよね。僕は今回の定期便で父からの手紙を受けとらなかったことで、不安に怯えてさえいるんだ。最終的にどうなろうと、父が戻ってきたら、君の愛を父に認めさせるために僕は力を尽くすよ。妹も君の味方になるだろう。

オートロッシュ

あなたは快い嘘で私をぬか喜びさせようとなさっているんですね。

シュヴァリエ

いいや、僕は妹が君を愛していることを知っているよ。

オートロッシュ

ああ、それでは過分すぎるというもの。

彼女に憐れんでもらえるだけで、私は十分幸せなのです。ラ・ロックが頻繁に彼女を訪ねていることは知っています。私の至らない点と彼の美質についても知っています。

彼は間違いなく、彼女から実に優しいもてなしを受けているでしょう。

シュヴァリエ

要するに、君は嫉妬深くなっていると言うべきかな。
でも、この点にかんしては、君の心は根拠もなしに不安を抱えているんだよ。
ラ・ロックが愛しているのは妹ではなく、姉の方だ。
妹にしたって、心変わりするようなタイプじゃない。
彼女は、一度愛した人をずっと愛するだろう。
願わくば、運命が、僕にも同じように都合よく働きかけてくれんことを！
ああ！

オートロッシュ

あなたがため息を漏らすとは！

シュヴァリエ

しかるべき理由あつてのことです。

オートロッシュ

すべてがあなたの願ひにくみし、すべてがあなたの望みに味方するはずですよ。
私には、どんな理由であなたのため息が引き起こされるのかがわかりません。

シュヴァリエ

もし君にわからないなんてことがあるなら、君の過ちは相当なものだな。
人がため息を漏らすときは決まって、自分は恋をしていると言っているのに。
白状するよ、そうさ、愛は、僕を打ち負かす力をもっていたんだ。

オートロッシュ

それは、逃れることはできても、避けることはできない不幸ですよ。
私たちがいる世紀においてこれがもし悪癖とみなされるなら、
少なくとも、すべての誠実な男たちがもつ悪癖といえるでしょう。

シュヴァリエ

昨晚舞踏会に現れたひとりの若く美しい女性が、情熱とは無縁だった僕の心に運命的な打撃を与える力をもっていたんだ。

オートロッシュ

その女性はこういった身分の方なのですか。

シュヴァリエ

彼女についてはまだ何も知らないんだ。

オートロッシュ

せめて名前くらいは知っているでしょう？

シュヴァリエ

まったく、僕は彼女のことを知らない。

そして、僕の不吉な運命を極限に導いたのは、
僕が彼女について話をした人間が皆、彼女を知らなかったということなんだ。
そして、唯一の好意の証として、美女のなかの奇跡とも言うべきそのひとは、
僕はすぐに彼女の消息を知ることになる、と僕に請け合ってくれたんだ。

オートロッシュ

親愛なる友よ、私はあなたを気の毒に思います。

シュヴァリエ

ところで、僕は君を引き留めすぎているね。

おしゃべりはここまでにしよう、歌いはじめるといい。

オートロッシュ

では、新作の芝居のなかの数行を歌いましょう。
ここで歌うのにかなりぴったりの内容だと思うんですよ。

〈第3場〉 ラ・ロック、ポリクセース、シュヴァリエ、オートロッシュ、ジョドレ

ラ・ロック

僕の愛が引き起こす不作法を赦してほしい、
妹よ、ここで、僕が望んだ歌を歌っておくれ。

ポリクセース (ソプラノで歌う。)

太陽の妹である月よ、輝ける使者よ、
あなたは、オランプ⁽³⁾が眼のなかにもつ美しい輝きに匹敵する光を
一度ももつことはなかった。

オートロッシュ

私もこの詩行を歌おうと思っていたのです。

シュヴァリエ

臆することはないよ。
君のパートと対照的なパートを歌っているからね。

オートロッシュ (カウンター・テナーで歌う。)

太陽の妹である月よ、輝ける使者よ、
あなたは、オランプが眼のなかにもつ美しい輝きに匹敵する光を
一度ももつことはなかった。

ラ・ロック

僕の勘違いでなければ、この声を僕は知っているぞ。
動揺しないで、妹よ、つづけておくれ。

ポリクセース (歌いつづける。)

そして、私の恋の炎を引きだした、この生まれつつある星⁽⁴⁾は、
私の魂のなかに、多くの炎を置いたのです、
月であるあなたが空のなかに置いた以上により多くの炎を。

オートロッシュ (彼もまた歌いつづける。)

そして、私の恋の炎を引きだした、この生まれつつある星⁽⁵⁾は、
私の魂のなかに、多くの炎を置いたのです、
月であるあなたが空のなかに置いた以上により多くの炎を。

(3) 「オランプ」は、詩人や恋する男が、愛する女性のために詩を作ったり手紙を書いたりする際に時折、その女性につける名前である。

(4) ポリクセースの兄ラ・ロックが、恋するシルヴァニールの眼光を星に喩えた表現。

(5) オートロッシュが、恋するアマントの眼光を星に喩えた表現。

エイコス XX

ラ・ロック（ポリクセースに向かって）

僕の恋人が姿を見せた。急いで歌い終えてくれ。

シュヴァリエ（オートロッシュに向かって）

急いで歌い終えたまえ、アメントがこちらにやってくる。

〈第4場〉 シルヴァニール、アメント、オートロッシュ、シュヴァリエ、ラ・ロック、ポリクセース、ジョドレ

アメント

あの歌は私に向けられたものだわ。

シルヴァニール

ああ、あなたのおごりは相当なものね。

私に向けて、オランプという別の名前を用いながら、ここで歌っていらっしゃるのよ。

（ポリクセースとオートロッシュは一緒に歌う。）

月であるあなたが大地と海の上で輝くとき、

あなたは目にするでしょうか、この世界で、

彼女の魅力に匹敵するものや、私の誓いに似たものを。

あなたは彼女ほど愛らしい女性を目にすることはないでしょうし、

私ほど忠実で、

恋の情熱に囚われた男を目にすることもないでしょう。

ポリクセース（ラ・ロックに向かって）

シルヴァニールに近づいて、怖れず彼女に話しかけてください。

シュヴァリエ（オートロッシュに向かって）

君はアメントと話す時間をもてるよ、

その間に僕は、この明るさを利用して、

君の声を邪魔した相当に不屈きな輩の顔を拝みに行ってみよう。

オートロッシュ

この義務にご同意ください、アメント、我がいとしのひとよ。

アマント（姉に向かって）

歌が私に向けられたものかどうかご判断くださいな。

ラ・ロック

シルヴァニール、私の誓いを証立てるこれらの印に同意してください。

シルヴァニール（妹に向かって）

歌が私以外の他の女性に贈られているかどうか判断なさいな。

シュヴァリエ

友よ、僕は何を見ているのだ？ ああ！ 何という驚き！

オートロッシュ

いったい、あなたは何を御覧になったのです！

シュヴァリエ

僕を魅了したひとだよ、

昨晚舞踏会であったまさにそのひとだ、
僕の目に映るやたちまち僕に愛されたひとだ。

ラ・ロック

ではあなたは私の妹を愛しているのか、私があなたの妹を愛しているように？

シュヴァリエ

ああ、このひとがあなたの妹なら、僕たちは何という幸運に恵まれているのだろう！
僕は彼女を愛している、そして、僕を掻き立てる熱情のなかでは、
彼女に愛されるためなら、僕は不可能なことでもやってのけるでしょう。
父が戻ってきたら、あなたは私の妹を手にするようになります。
その間、僕はあなたの妹から何を期待できるのだろうか。
彼女に訊いてみてくださいませんか。

ポリクセース

あなたの恋の炎におたずねください。
たくさんのお愛をもらえる私は、その愛を少しあなたに与えることができます。

〈第5場〉 ラ・フルール、シルヴァニール、アメント、シュヴァリエ、オートロッシュラ・ロック、ポルクセヌ、ジョドレ

ラ・フルール

海の上で私の財のすべてを失ったあと、
私は正当な理由によって光と世界から逃げている。
人徳のない財はあらゆるところでもはやされるが、
財をもたない人徳は軽蔑しか獲得しないのだ。
我が子たちに会いにいき、私たちの破滅に涙しよう、
急いで家に入ろう、扉は開けっぱなしになっているな。

(彼は家に入る。)

シルヴァニール

もう少し落ち着いてお話するために、
家のなかに入りましょう。

シュヴァリエ

ちょうどいい折だね。

あまりに激しい歓喜に僕の魂が打ちのめされたせいで、
そうするのをすっかり忘れていたよ。

シルヴァニール (急いで家から出てきて)

逃げましょう。

シュヴァリエ

何があなたをそんなに動揺させているんだ？

シルヴァニール

お父さまが戻っていらしたのよ、人とは思えない形相で。
手に短刀をもって私たちの方に向かって来られるわ。
お父さまの狂乱を止めてください。

ラ・フルール (シュヴァリエを攻撃しようと腕を振りあげて)

ああ、油断ならないやつめ！

シュヴァリエ

ああ、父上！

あなたの息子をご容赦ください。

ラ・フルール

我が息子！ 私は何をしようとしていたのだ？

私たちのすべての財は失われた、だが私たちの名誉は救おう。

私の娘たちはそれぞれ卑しき誘惑者をもっている。

私の眼にしかと見えているのは見知らぬふたりの恋人、

娘たちの手に口づけながら、娘たちとともに入ってきた。

シュヴァリエ

あなたは激昂するあまり、間違いを犯しているのです。

彼らは徳のある男たちですし、僕の友人でもあります。

ラ・フルール

だがあの者らは愛している。

シュヴァリエ

愛は罪ではありません。

彼らが望んでいる結婚が、彼らの恋の炎を正当なものにしてくれます。

それに、運命が、海の只中で、

僕たちの船とともに僕たちの希望のすべてを壊した以上、

彼らの申し出を煩わしいものとお思いになられませぬよう。

彼らは、妹たちの不幸にもかかわらず、彼女たちを愛しているのですから。

ラ・フルール

これ以上賢く話すことはできないというくらい弁がたつな、我が息子よ。

約束しよう、彼らをより穏やかに遇するとな。

オートロッシュ

この約束に、私たちも思いきって近寄りましょう。

変わらずアメントを愛してきたことを、私はあなたに告白します。

この愛は永遠ですし、過酷な運命が自分の持ち物にたいしてすべてを可能にしようとも、

私の恋の炎にたいしては何もできません。

ラ・ロック

こんなにも恋をしている私が、財に執着するなどありえません。
シルヴァニールの中にある、十分珍しい宝を私は崇めているのです。
彼女は、私にとって価値あるものを何ひとつ失っていません。
彼女にはなおも美しい目の輝きが残っているのですから。

ラ・フルール

これ以上誠実な願いをもつことは誰にもできまい。
ところでお二方、あなた方がどなたなのかたずねてもよろしいか？

オートロッシュ

幸運にも、私は十分に高貴な身分の両親のもとに生まれ⁽⁶⁾、
宮廷において、様々な名誉を数多受け取ってまいりました。
フランスは、私を賞賛するのにたびたび時間を割いております。
この剣は、王の寵臣より賜ったもの。
最も高い位にある方がたの寵愛を得てきたのです。
この高価なダイヤは、ある王族の方に由来するもの。
君主のなかでも最も偉大な御方の知己を得るという幸運も手にしております。
その御方からの尊敬の輝かしい印の数々も手にいたしました。
彼は時折、宮廷人たちの進言以上に、私の言葉に耳を傾けられますし、
私が身に付けております衣服は、彼から頂戴したもののうちの一着なのです⁽⁷⁾。

ラ・フルール

あなたを婿にできるのは、私にとって大変な名誉だ。
さて、いまひとりの恋人はどのような方なのかな？

-
- (6) 実際、オートロッシュの出自は悪くない。高等法院の執達史を父に持ち、裕福な家庭で質の高い教育を受けている。息子の人生の舵を取ろうとする母親に反発して実家を飛び出さなければ、役者とはおよそ対照的な、シャトレ裁判所の裁判官の職に就いていたであろう。
- (7) 大貴族が贈り物として、役者の衣装代を負担するのは当時の一般的な習慣である。役者たちは衣装のためなら、他のあらゆるものを儉約してでも出費を惜しまなかった。舞台衣装に限った話ではない。舞台がオフの日も、彼らは常に、きちんとした身なりをしていた。宮中への参内や貴族との面会のために、流行を追うこと、普段着にまで金をかけることを余儀なくされたのである。

ラ・ロック

お教えいたしましょう。
私は、正直に申し上げれば、
生まれこそ運命に優遇されませんでした、
そのとき運命の犯した過ちが私にとって不当であっただけに、
運命はその後、私の人生を十分評価されるものにしてくれたのです。
私は他の人間より高い地位にあって、
しばしば両手に王笏を納めている自分を見えました。
数多の英雄たちの運命を決定づけ、
王冠を頂いた頭を足もとに見てもきました。
偉大であり名高くもある武勲によって、
正当な王たちの復讐をし、暴君たちを滅ぼしてもきました。
財宝を獲得し、城塞を壊し、
戦いを引き起こし、勝利を得、
地球にある最も貴重なあらゆるものの
輝かしい所有者に幾度もなったのです。

ラ・フルール

おお！ 私は私の一族のなかになんと多くの栄光を見ることになるのか！
ところで、あなた方の御職業はなんなのですか？ お願いですから、教えてください。

ラ・ロック

私たちはふたりとも、心地よい休息を満喫しているところなのです。

ラ・フルール

ですが、結婚後、あなた方は結局何をなさるおつもりか？
私はそれが知りたいのです。

オートロッシュ

もしあなたにそれについて申し上げねばならないのであれば、
私たちはしようと思います……

ラ・フルール

つづけてください。

オートロッシュ

その……

ラ・フルール

はい？

ラ・ロック

芝居を。

ラ・フルール

芝居！つまり、なんです、あなたがたの大きな財とはそれですか？

では、あなたがたふたりは、単なる役者に過ぎないと？

妻なら別の場所に探しに行かれるがよい。

私の娘たちは、あなたがたの恋の相手ではない。

娘たちに財はないが、あなたがたの足を別のところに向けられよ。

娘たちは名誉をもっているが、あなたがたにはない。

あなたがたの技芸は、無知な大衆の常軌を逸した欲望に気に入られるだけを目的とした危険なものだし、

あなたがたが偉大な行為として見せるものといったら、

殺人かスリか売春のみ、

あなたがたが巧みな芸をとおして教えることといったら、

美德を離れて悪徳を実践すること以外、何もない。

あなたがたを駆り立てている稼ぎは卑しいものだ、あなたがたは、自分たちが演じてみせる大罪の褒賞で、もうけているにすぎないのだから。

ジョドレ

やーれやれ、この尊敬すべき御老人の言うことを信じたら、

役者は皆まったくの役立たずってことになっちまう。

オートロッシュ

芝居に関しては、皆あなたと一緒に言うかもしれませんが、

かつてそれは、あらゆるもののなかで最も卑しい技芸であったと、

そして、あなたがお若かりし頃にはまだ、

あなたに憎まれるにふさわしい不道德な要素に満ちていたと。

ですが、今日、驚異的な才能をもった者たちが、

彼らの豊かな学識を詰めた著作によってこの技芸を浄化してからは、
 技芸における道徳的欠陥は不滅の優美さへと変換され、
 優美さのもつ魅力は、最も美しい魂にとって感じやすいものとなっています。
 舞台はひとつの学校であり、もはやそこでは、
 大罪を嫌悪することと、徳を愛することしか教えません。
 舞台は、愚者と賢者を同時に感動させます。
 心の様々な揺れ動きを見せながら、それと向き合う方法も見せるのです。
 芝居は、生き生きと、私たちに表現させます、
 人が手本にすべきことや、避けるべきすべてのことを。
 芝居のなかで犯罪が起きるときには、その犯罪は恐ろしいものとして示され、
 美徳が実践されるときには、その美徳は愛すべきものとして示されるのです。
 罪人は芝居のなかで、受けるべき罰を受けることになります。
 彼は時々高みへと上り詰めますが、それは、より高い場所から落ちるため。
 芝居のなかで勝利するのは無実の人間です。運命が彼を侮辱するとしても、
 そのようにして攻撃するのは、後々彼をより高みへと押し上げるため。
 要するに、芝居とは、同時に二つのことを可能にする技芸、
 理性を説きつつ、感覚を楽しませることができるといえる技芸なのです⁽⁸⁾。

ラ・ロック

芝居のもつこれら多くの真実に、私は敢えてもうひとつ付け加えましょう、
 この技芸は人の名誉を貶めるところか、名誉を高めるものであると。
 かつての芝居とはまったく違うのです。
 芝居の目的は、無知な大衆に気に入られることではありません。
 比類なきその美しさはもはや、
 高貴な精神や王の魂を揺さぶるためのものでしかないのです。

(8) このオートロッシュの台詞のなかでも、続くラ・ロックの台詞のなかでも、かつての芝居といまの芝居が対比されている。ラ・フルールが批判の対象にしている芝居は、彼らふたりからすればかつての芝居でしかない。ここで浮き彫りになっているのは、芝居に対する世代感覚の違いである。芝居の道徳的効用の喧伝や役者の道徳性の擁護は20年前から、グジュノー（1631年）とスキュデリー（1632年）の同名の戯曲『役者たちの芝居』*la Comédie des Comédiens*、コルネイユ『舞台は夢』*L'Illusion comique*（1635年）、スキュデリー『演劇の擁護』*l'Apologie du Théâtre*（1639年）等で熱心に行われていた。

スカロン『ロマン・コミック』*le Roman comique*（1657年）のなかにも、芝居がかつて有していた不道徳な要素は、少なくともパリにおいては排除されているといった類似の指摘が見られる。

これ以上の名誉があるでしょうか、
王のなかでも最も名高い御方にとって心地よいものであるという幸福、
王妃のなかでも最も高德で偉大な御方が抱えておられる
大いなる苦しみに、ささやかな喜びを混ぜ合わせるという幸福、
そして、天からやって来たなかで最も輝かしい精神、
類まれなる魂によって生命の息吹を与えられ、
財よりも有徳さによって偉大であられるひとりの大臣殿⁽⁹⁾の
骨の折れる務めに休息を与えるという幸福にまさる名誉など。

ラ・フルール

つまり、あなたがたの言うことを信じるなら、あなたがたに匹敵するものは何もないとい
うわけですか。
しかしお二方、あなたがたの芝居がそれほど気品があり優美であるなら、
誇りをもってそれを実践したいと願う者には、
多くの判断力、巧みさ、記憶力が必要となるでしょう。
その技芸に取り組もうとする者には、何ひとつとして欠けてはいけません。
うまくできるだけでは不十分。卓越していなければならないということになる。

オートロッシュ

この点につきましては、あなたは心からご満足なさるにちがひありません。
私たちは完璧な一座を作り上げることができます。
私たちの一座は少し前に、パリにて解散してしまいましたが⁽¹⁰⁾、
残っている者を集めるのはたやすいこと。
私には妹がふたりおりますし、ラ・ロックにも、非常に魅力に富んだ妹がひとりいます。
彼女こそ、あなたの御子息が激しい情熱で愛している女性です。
私たちには召使いと友人たちと親戚もいますので、
それぞれに異なる役を与えることができます。
そして、そこにあなたのお嬢様方とその兄を加えれば、
私たちは、人々を楽しませるのに十分な力をもった一座を完成させるでしょう。
人々が私たちに満足するかどうかを判断するにあたり、
私たちは、あなた以外の他の審判者を探そうとは思いません。

(9) 喜劇愛好家として有名なマザラン枢機卿 (Jules Mazarin, 1602-1661)。

(10) 【解題】冒頭を参照。

ラ・フルール

だが、それについてきちんと判断するには、
あなたがたと一緒に芝居を演じるのを見なければならぬと思うのだが⁽¹¹⁾。

ラ・ロック

たしかにそのようにしなければなりませんね。あなたの御子息とその妹方は、
常に芝居のもつ魅力を評価してきました。
そんな訳で、3人ともそれぞれ芝居の詩句については十分知っていますから、
改めて勉強する必要は誰にもありません。
さて、様々な詩句であなたにお楽しみいただくために、
私たちは4つの異なる題材を上演することにいたしましょう。
まずは田園劇です。これをとおして、あなたは知ることができるでしょう、
愛はしばしば田園風の装束をまとふのを好むということ、
田園においても、宮廷においてと同様、愛は掟を与えることができるということ、
愛は王たちの心と同様、羊飼いたちの心を揺さぶるということ。
そのあと演じますのはジュルレスク、
そこではお目かけましょう、
低俗な精神に認められる欠陥のおかしなイメージを、
軽蔑の念を抱かせるのに適したかたちで。
続いてあなたは悲劇を御覧になられます。
そこでは、私たちはあなたに崇高な文体で示すことになるでしょう、
最も偉大な心が分別を失うとき、
その人のなかで制御できなくなった欲望が引き起こしうる不幸を。
最後に、これらの試演を経て自信を得た私たち一座が
お見せするのは、悲喜劇の題材です。
そこでは、私たちはさらに、装置として組み込むことができるでしょう、
空中に浮かぶ機械仕掛けと、魅力的な音楽を。
私たちはそこで、言葉を失くしているあなたにお伝えするでしょう、
あらゆる力は美德の力に屈すると、

(11) 第2幕以降、ラ・フルールは他の役者たちによって演じられる芝居の鑑賞者になるため、台詞も出番も少ない。だが、劇場内に居る本物の観客と舞台の橋渡しをするという重要な役割を担っているのはたしかである。実際、コルネイユ『ソフォニスブ』*Sophonisbe* (1663年)のレリユス役、ラシーヌ『ブリタニクス』*Britannicus* (1669年)のビュリュス役、『バジャゼ』*Bajazet* (1672年)のアコマ役を初演するなど、彼のその後の活躍ぶりは華々しい。

いかなる暴力によって打ち負かされようとも、
人々の心を惹きつける最も偉大な力は徳の力であると。

ラ・フルール

これ以上に公正な方法は何ひとつ提案できませんまい。
あなたがたが約束なさっているものは、私にとって大いに心地よい。
よって、あなたがたの望みに異を唱えることはしません、
あなたがたの言葉が結果を伴いさえすれば。
ところで、私を急き立てている欲望を満足させるために、
あなたがたはいつ、約束を果たすおつもりか。

オートロッシュ

私たちの愛は、あなたよりもはるかに、すぐにそうせよと私たちを急き立てております。
あなたは明日にでも、それは心地よい時間をもたれるでしょう。
壊さず手もとに残しております私たちの舞台装置は、
わずかな時間で容易に準備できますから、
明日、あなたを前にして、私たちは皆、
マレー座のなかでこの試演をする準備を整えているでしょう。
今夜しておかなければならないのは、4つの演目を選び、
私たちの間で配役を決定することです。

ラ・フルール

おっしゃるとおり、その選定は重要だ。
それについてもっとよく考えるために、私の家に入りましょう。

一幕の終わり

第二幕 「クロミール」 *Clomire* 田園劇

担当：塩谷優衣

【解題】 第二幕で演じられる田園劇は羊飼いたちの恋を題材とする演劇ジャンルである。同ジャンルが流行したのは1620年代で、その後は暫く下火となっていたが、トリスタン・レルミットがロトルーの遺稿に加筆して作った田園劇『アマリリス』*Amarillis* が1652年にオテル・ド・ブルゴーニュ座で上演されて成功したことが契機となり、再び勢いを取り戻す。『アマリリス』は3人のサテュロ

スの礼節を欠く言動が印象的で、上演ではジャンヌ・オズーの男装が観客を魅了したが、キノーはサテュロスと男装を「クロミール」に取り入れている。更に『アマリリス』と同年に上演されたトマ・コルネイユの田園劇『途方もない羊飼』 *Le Berger extravagant* からは偽のエコーの着想を得たと考えられる。

主筋は、羊飼ダフニスとフィレーヌが同時に想いを寄せる少女クロミールを巡って繰り広げる対立である。2人はクロミールを審判者に据えた舌戦で対決するが、両者の弁舌は「与える者」と「受け取る者」の主従関係を巡る議論を借りて愛の本質を示している。フィレーヌが「与える者」を優位とみなし、贈物をする見返りにクロミールの愛を得ようとするのに対して、ダフニスは恋愛において財産は問題にならないことを説く。ダフニスの論にはタツソ『アミンタ』 *L'Aminte* (1573年) が示すような、黄金時代の純朴な愛と利害(金)に屈する愛の対立が見られる。ダフニスの弁舌は常にフィレーヌのそれを凌駕しており、とりわけ第4場では、クロミールのつれなさを嘆くフィレーヌの言葉に、エコーに扮したダフニスが恋敵への辛辣な皮肉に満ちたこだまを返して、自らの優位を印象づける。しかし、審判者であるクロミールは舌戦の勝敗を決することを避ける。贈物の見返りとして愛を求めるフィレーヌには自分の花冠を与えて見返りの義務を逃れ、フィレーヌが主張する「与える者」の優位を否定する一方で、贈物によって愛を得ようとする行為を劣勢者のものとみなすダフニスには花輪を贈らせ、彼自身を劣勢者にすることでフィレーヌ同様にダフニスの優位も否定する。クロミールは、第2場で自分を奪い合って喧嘩をするサテュロスたちから逃れたように、第5場では2人の男性の愛の告白を言葉巧みにかわして逃げ去る。最終場でクロミールは、田園劇でしばしば見られるように、危機(サテュロスたちの暴行)から自分を救ってくれたダフニスの愛の奉仕に心を動かされてダフニスの愛を受け入れる。愛の対象に仕えることは恋する者の義務であり、恋人同士の関係はフィレーヌが示すような贈物を介した「与える者」と「受け取る者」の主従関係とは異なる。構成上は、クロミールを巡る恋敵同士の対立が、ダフニスとフィレーヌの間では機知に富んだ言葉のやり取り、サテュロスたちの間では腕力による殴り合いという対照的な行為によって反復されている。

副筋のフィレーヌとドリーズの恋の物語は、遭難と帰還、変装、決闘(未遂)を含んだ悲喜劇的な展開を見せる。ドリーズの死の誤報によってフィレーヌは一時的にクロミールに心変わりするが、最終的にはドリーズに命がけで仕えるべきであったと後悔し、恋する者の義務を思い出すことでドリーズに赦される。主筋で登場するサテュロスたちは、恋敵フィレーヌを襲う役で副筋にも登場する。第二幕の幕開けと同時に『アマリリス』のサテュロスたちを思わせる直截な発言によって観客にショックを与えたであろう反面、最後は男装の女羊飼いの脅し文句によって駆逐されており、性愛と暴力の象徴であるサテュロスはもはや実効性を失っていると言える。しかし、エコーは偽物であり、サテュロスの役回りは矮小化されているとはいえ、これらの田園劇の伝統的な要素は最大限に活用され、主筋における洗練された言葉のやり取りによる愛の議論を盛り立てている。

【あらすじ】 ラ・フルールが舞台袖の座席につくと、クロミールが2人のサテュロスに追われて登場

する。彼らが喧嘩を始めた隙にクロミールは逃げ出す。続いて遭難で死んだはずのドリーズが登場し、モンタンに事の顛末を語り、自分の不在中に妹に心変わりしたフィレーヌの真意を確かめるべく男装していると明かす。フィレーヌが登場し、クロミールのつれなさを嘆いていると、恋敵のダフニスがエコーのふりをして彼の嘆きに冷淡なこだまを返す。2人は、どちらがクロミールに愛されているかを巡って口論し、クロミールの判断を仰ぐが、クロミールはどちらにも好意がないことを示して立ち去る。落胆したフィレーヌがドリーズの優しさを懐かしみながら眠りにつくと、クロミールの婿候補を襲おうとサテュロスたちが現れる。男装したドリーズが追い払う。目覚めたフィレーヌは裏切りの罰として殺してくれるよう頼むが、ドリーズはフィレーヌの後悔に心を打たれて赦す。そこへサテュロスたちから逃げてきたクロミールが登場し、窮地を救ってくれたダフニスに愛を誓う。2人はよりを戻したばかりのドリーズとフィレーヌに合流し、4人はドリーズの冒険譚を聴き、婚礼の準備をするために家に入る。

【二幕の登場人物】

ラ・フルール	La Fleur	役者
オートロッシュ	Hauteroche	役者
クロミール	Clomire	羊飼いの娘
セルヴァージュ	Selvage	サテュロス
フォレストン	Forestan	サテュロス
ドリーズ	Dorise	クロミールの姉 ⁽¹⁾ 、羊飼いに扮している。
モンタン	Montan	ドリーズの養育係
フィレーヌ	Filène	羊飼い、クロミールを愛している。
ダフニス	Dafnis	もう一人の羊飼い、クロミールを愛している。

舞台は***島⁽²⁾

-
- (1) 原文は *Sœur de Clomire*。姉妹のうち、フィレーヌと先に婚約していたのがドリーズであることから姉とした。ダフニスとクロミールは同年齢である（第5場参照）。
- (2) 舞台となる島の具体的な呼称は不明。第3場でドリーズはデロス島へ巡礼に向かう途中で遭難し、シシリアへ向かう舟に乗って帰還したと述べていることから、エーゲ海の何処かの島の設定であると考えられる。

〈第1場〉 ラ・フルール、オートロッシュ

ラ・フルール

陽は昇りました⁽³⁾、

そろそろ準備が整うところですか？

オートロッシュ

ええ、直に、

こちらにご用意しましたお席から

お約束した試演をご覧になれますよ。

ラ・フルール

では直ぐに、あなたの一座に始めさせてください、

観たくてうずうずしているのです。

オートロッシュ

彼らがやって来るのが見えます、

おかけください、そしてどうかこの機会に

よくご覧ください。

(ラ・フルールは舞台脇の椅子に腰かける⁽⁴⁾。)

〈第2場〉 ラ・フルール、クロミール、セルヴァージュ、フォレストン

クロミール

もうおしまいだわ、神様！

セルヴァージュ

捕まえたぞ、つれないお嬢さん！

(3) ラ・フルールの台詞を直訳すると「太陽は濡れた住まいを離れた」。夜が明けたことを詩的な表現で述べている。

(4) 王侯貴族は舞台上で観劇したため舞台袖には彼らの観覧席が設けられていた。ラ・フルールに用意された席は、このことを踏まえている。第2場以降、ラ・フルールに台詞はないが、すべての場のト書に他の登場人物と共に名を連ねており、常に舞台上にいることがわかる。

エイコス XX

か細いから抵抗しても無駄だよ。

クロミール

お願い、離してちょうだい！

フォレストン

腹ペコの時に、こんなご馳走を放っておくなら
俺はとんだ馬鹿者ってことになるな。

クロミール

死んじゃうわ！

セルヴァージュ

いや、いや、怖がることはない、
俺たちが、あんたにするイタズラで死んだ人など誰もいないよ。

クロミール

何ですって、無礼をはたらこうというの？

フォレストン

運命の女神も、愛神も、恥ずかしがる奴らを馬鹿にしてるぞ。

セルヴァージュ

あんたの旦那にとフィレーヌがあてがわれたのは知ってるんだ、
あいつは俺のありったけの気遣いの見返りを、やすやすと持って行っちまう。

フォレストン

この間は俺があんたにやったジャスミンの帽子、
あれを、あいつが被ってるのまで見たぞ。

セルヴァージュ

獲物に飛びかかる獅子よりも勇み立ってるぞ、
心ゆくまで楽しむとしよう。

フォレストン

大人しくしな、今度こそ
あんたの操を餌食にしてやる。

セルヴァージュ

俺がこの娘をいつもの洞窟に連れてくんだ。

フォレストン

お前の洞窟だって！ ああ、この娘は俺の洞窟に連れてくさ。

セルヴァージュ

わからないのか！ お前のお喋りはみんな余計だ。
俺がこの娘に飽きたら、その時だけはお前のものだ。

フォレストン

俺を勘定に入れていないな、俺を無視してやがる。
この娘が誰かに獲られちまう前に、存分に楽しむつもりだ。

セルヴァージュ

お前が先に、この娘をものにすると？

フォレストン

何、違うって言うのか？

俺のものだ！

セルヴァージュ

お前だって？

フォレストン

そうだ、俺だ。

セルヴァージュ

おいおい、馬鹿言うんじゃないぞ。

フォレストン

馬鹿言ってるのは、お前の方だろう。

セルヴァージュ

気をつけろ、怒るぞ。

フォレストン

俺がお前を怖がると思うか、子山羊ちゃんたちの中でも一番の意気地なしのお前を？

セルヴァージュ

それはお前のことだろう、俺は何度もお前を黙らせてきただろう？

フォレストン

よし、殴り合いで決着をつけるしかないな、
強い方が勝ちだ。

クロミール⁽⁵⁾

とんだことになったわ！

さあ、喧嘩してる間に逃げなくては。

(クロミール逃げる。)

セルヴァージュ⁽⁶⁾

やられた。

フォレストン

すげえの喰らった。

セルヴァージュ

誰か止めに来てくれないもんか。

フォレストン

堪忍してもらおう、もう一発喰らったら、おしまいだ。

(5) ト書はないが、明らかに傍白である。

(6) ト書はないが、これ以降4つの台詞はセルヴァージュ、フォレストンによる傍白である。

セルヴァージュ

ちょっと待った、相棒、休戦といこう。

フォレストン

大賛成だ、物凄く休憩したかったんでね。

おや、クロミールは。

セルヴァージュ

ああ、何てこった、あの娘はすっかり遠くにいとみた、
これ以上、あの娘を追っても、むだ足を踏むことになるだろう、
どうだい？

フォレストン

痛くてしかたがない時に何を言えって言うんだ？

セルヴァージュ

俺の背中血まみれだ。

フォレストン

俺のよりましさ、
ぶん殴られたってのに、何にもなりゃしない。

セルヴァージュ

あんなふうには捕まえてたのを離すなんて、とんだ馬鹿じゃないか？

フォレストン

お前のおつむが足りないからだろ、

セルヴァージュ

というよりお前の間が抜けてるからだろ、
あの娘の馬鹿げた貞操観念を警戒すべきだった、
お前は、あの娘の傍を離れるべきだったか？

フォレストン

何だってお前は傍から離れてたんだ？

セルヴァージュ

言い争いはもう止そう、俺たちの割に合わない、
俺たち二人、どちらも同じくらい間抜けだってことだ、
もし、あの娘をまた見つけたら、もっと協力し合わにゃならん、
あの娘の綺麗な瞳のために、こんなふうに殴り合うのはもう止めだ。

フォレストン

あの娘の親どもは、フィレーヌをあの娘の夫にするつもりだぞ、
俺たちの辛さ、この恋敵にも味わわせてやろうじゃないか。
奴を捕まえて、ほこほこにしてやろう、
あの娘の花婿気取りでいられなくしてやるんだ。

セルヴァージュ

何より、俺たちに有利なように、奴の不意を突かにゃならん。

フォレストン

よしてきた、おい誰か来るぞ、この森に入ろう。

〈第3場〉 ラ・フルール、ドリーズ、モンタン

ドリーズ (男の羊飼いに扮している)

近寄るのは、よしまししょう、サテュロスたちがいるわ。

モンタン

森に入っていきますよ、先へお進みください、
それに、そのお姿で奴らの前にご登場になられても、
そう容易くは貴女様だとわからないでしょう。
かつてあれほど、貴女様を可愛がってお育てした私ですが、
このようにお姿を変えておいででは、貴女様とは見抜けませんでした。
他には誰もおりません、さあ、お願いします、
教えてください、一体どのような神様が貴女様のお命をお救いになったのか、
そして、どのような目的で
こちらにご到着になってからというもの女性であることを隠しておいでなのか。

ドリーズ

幼い頃から私に尽くしてくれたのですから、
貴方にだけは、この秘密を打ち明けましょう。
この集落では荒れ狂う波に私が呑まれてしまったと
皆が信じているのも無理ありません。
知っての通り、母は私たちの恋を想って、
私を妻にと、かつてフィレーヌに約束しました。
そして彼が私に誓いを立てる前に、母は私を連れ出して
デロス島⁽⁷⁾で私のためにかけた願を全うしようとしました。

モンタン

はい、この運命の旅で私どもの集落の舟が突然の嵐に遭い転覆したことは、
これ以上ないほど存じ上げております。
舟の残骸は、この岸边まで風に押されて流れつき
早々に、あの悲しい真実を私どもに伝えたのです。

ドリーズ

沈没しかけた時、人々は海に小舟を投げました、
私は運良く、この機を掴み、
母のいないまま小舟に乗り込みました。そして直後に
吹きすさぶ風が私たちの眼前で舟を打ち砕きました、
嵐が止むともっと良い風が吹いて
私たちをデロス島の浜辺に押し流しました。
私はそこで名誉を危険に晒すまいと、
自分の服を男の羊飼いの服に取り替えました、
そして数か月後シシリアの舟に乗り込んで、
この島に辿りつきました、
ついてみれば私が愛したあの恩知らずは、
妹クロミールを愛していて、あの子と結婚しようとしているのです。
ここで皆に私と知れる前に、
こっそりあの浮気者と話しておきたいのです。

(7) エーゲ海キュクラデス諸島の中央に位置する面積約 3.4km²の小島。アルテミス（ディアース）とアポロンの生地とされ、古代ギリシアにおけるアポロン信仰の中心地のひとつ。宗教、商業、政治の要衝として栄えた。

エイコス XX

貴方はあの人がこの場所によく一人でやって来ると言いましたね、
私はあの人と話そうと、ここへやって来たのです。

モンタン

あのお方が来たようですよ。

ドリーズ

確かに彼だわ、

モンタン

おや、動揺されているのですか？

ドリーズ

ああ、あの人が近づいて来ると、ますます弱気になってしまうわ！

モンタン

何と、お逃げになるのですか？

ドリーズ

だって、見えないのですか

ダフニスが直ぐ傍をつけているじゃありませんか！

モンタン

見えました。お隠れください。

ドリーズ

そのつもりです。

モンタン

あのお方がお一人になるのを待って、貴女様にお知らせいたします。

〈第4場〉 ラ・フルール、フィレーヌ、ダフニス

フィレーヌ

喧騒から離れるとほっとする！

恋をしているなら誰も、既に十分、連れ立っているものだ⁽⁸⁾。

あの森へ行こう、あそこなら何時でも

ひんやりとしていて、静かにしてられる。

ダフニス（舞台袖からエコーのふりをして。）

いられる⁽⁹⁾。

フィレーヌ

この巖は、誰も経験したことのないような僕の不幸に同情してくれる、

続けておくれ、さあ、エコー、聞こえたかい？

ダフニス

はい。

フィレーヌ

クロミールときたら僕に物凄く冷たいのだよ、

どうすれば、彼女は僕を愛する？

ダフニス

愛する。

フィレーヌ

何だって、彼女は僕の愛を軽蔑しているというのに、

何ができると言うのだ？ つれないあの娘は僕の嘆きを嘔うのだ。

(8) 原文は « Quiconque a de l'amour, est bien accompagné ». 恋をしている者は孤独を好み、社交を煩わしく思うということ。

(9) ダフニスはフィレーヌの台詞の最後の単語または音節を反復している。ダフニスが繰り返す7語のうち5語は動詞の命令法であるが、訳す際はフィレーヌの台詞の言葉をそのまま反復することを優先し、必ずしも命令文にはしていない。

ダフニス

笑うのだ。

フィレーヌ

今にも死にそうな心地の時に笑うだなんて、お前は妙な応えをするのだな、
どうやって懲らしめてやろう？ やすやすとしたあの心変わり。

ダフニス

心変わり。

フィレーヌ

変わるものなら、お前の助言も満更ではないのだが、
結局のところ僕はあの娘の花婿になれない？

ダフニス

なれない。

フィレーヌ

なれない、ああ、この答えはあんまりだ！
どうだろう、あの娘はこの先もずっとつれないまま？

ダフニス

まま。

フィレーヌ

まま！ じゃあ一体どんな男が、あの娘の愛の誓いを望めると言うのだ、
彼女の誓いを勝ち取るのに相応しい奴など誰がいる？ 僕以上に。

ダフニス（姿を現しながら。）

僕だ。

フィレーヌ

君？ 何だ、たった今、返事をしたのは僕の恋敵か！

ダフニス

そうさ、あの手この手で君をがっかりさせてやろうとしていたのは僕だ、
クロミールは王様の価値にも勝る女、
それでも僕は、少なくとも君よりは、あの女に相応しい。

フィレーヌ

熱くなるのはよそう、僕のみたところ、
あの娘は僕らの間に相当な差をつけているぞ、
彼女は僕を好いている、

ダフニス

思い上がりのせいで、そう勘違いしたのさ。

フィレーヌ

この押し問答、容易に決着をつけられよう。
あの娘の見せた好意を披露し合おうじゃないか、そしたら待ったなし、
あの娘の愛情が薄い方は、望みを持つのは止めにしないか？

ダフニス

始めなよ、聞いてやる。

フィレーヌ

この村のほど近く、
僕の羊の一匹が、あの娘の羊の群れに迷い込むと、
彼女はその羊を撫でて、そいつをくれるよう僕に頼む。

ダフニス

そんな願いは、僕にしてみれば大したことはない、
こう言うなら大賛成だ、
人は愛してもいない者の財産を愛することができる。

フィレーヌ

僕の姿を見るなり嬉しい気持ちが逸り、
あの娘の顔はほっと赤くなる。
百合も気後れするだろう彼女の白い肌は、

手折ったばかりの撫子のような紅に変わる。

ダフニス

そんな変化、君の期待が虚しいことを示してる、
火照った顔は嫌悪の証に過ぎない。

フィレーヌ

彼女の食事中に、そうとは知らず僕がやって来ると、
美しいあの娘は僕が近づくので食べるのも忘れてしまう。

ダフニス

雌羊と同じさ、狼が現れたのを見れば、
迫りくる死に草を食むのも忘れてしまう。

フィレーヌ

澄んだ小川のほとりで彼女に出くわすと
あの娘はふざけて僕に水をかける、
この気の許しよう、幸運にも僕があの娘に好かれているのがわかる、
君も認めるべきだ。

ダフニス

僕の考えは正反対、

そんな戯れには何も期待できない。
あの女が水をかけるのは君の恋の炎を消すため、
そしてディアースに倣い、
君の不敬な頭の上にアクタイオンの角兜を被せてやろうというわけさ⁽¹⁰⁾。

(10) 狩の名手であるアクタイオンは狩猟の休憩中、処女神ディアース（アルテミス）の水浴を偶然目撃してしまう。羞恥心と怒りに駆られた女神は手元に矢がないため、泉の水をすくってアクタイオンの顔と髪に浴びせる。するとアクタイオンの頭に角が生え、やがて牡鹿の姿となり、自分の飼っている猟犬らに獲物として追い回され、ついには食い殺される。ヒュギヌス『神話伝説集』は牧人アクタイオンが、アルテミスが水浴しているところを目撃して犯そうとしたため、女神は怒ってアクタイオンを牡鹿に変えて飼い犬に食らわせた、というバージョンも採録している。

フィレーヌ

君のひねくれた心は何でも逆さにみるのだな、
だが君だって少なくとも自分の恋に関してはそううまくはいってまい。
さあ、あの娘は君に何をしてくれた？

ダフニス

君のようなお喋りは、黙っておくべきことを言うてしまう。
僕らの秘めた恋については腹に納めておくよ。
何より本当に恋をしている者なら慎重深いはずだ。

フィレーヌ

何だって、何も話さないつもりか？

ダフニス

君に教えることは何もないさ。

フィレーヌ

だが話すと約束したろう？

ダフニス

話を聞くと言っただけさ。

フィレーヌ

何だと、こんな侮辱を受けるというのか？

ダフニス

そう熱くならず、
クロミールに任せて、お互い納得するでしょう。
これほど慕っているあの女の気持ちを訊いてみるんだ、
そして、あの女がより好いている方に譲ることにしようじゃないか。

フィレーヌ

あの娘の決定に従うのか？

ダフニス

ああ、僕の想いに反したとしてもね。

フィレーヌ

そうなるに決まっているさ。行こう、あの娘ひとがいる。

〈第5場〉 ラ・フルール、ダフニス、フィレーヌ、クロミール

ダフニス

急いで何処へ行くのです？ 僕らを苦しめる女ひと。
何か恐ろしいものでもあるのですか？

クロミール

ええ、二人のサテュロスが怖いのです。
ずっと私を追い回していました。それで逃げているのです。

フィレーヌ

僕のいるところなら、何も怖がることはありませんよ。
ある諍いについて意見をお聞かせください。然るべき訳あって、
二人して、貴女にお尋ねするのです。
貴女の神々しい美貌に、僕も彼も魅了されています。
僕ら二人のうち、どちらが愛されるに相応しいか、決めてください。

クロミール

そのような頼み事をされると、すっかり困ってしまいます、
貴方がたのどちらも、愛してもいなければ、憎くもありません。
訳を仰ってください。すべて聞けば、
貴方がたのどちらが好ましいかわかるでしょう。

フィレーヌ

僕の幸せは……

ダフニス

僕の期待は……

フィレーヌ

確かなものです……

ダフニス

薄れてしまいます。

クロミール

フィレーヌが先に始めました、続けさせてあげてください。

フィレーヌ

僕の幸せは約束されています、貴女が話を聴いてくださるのですから、
貴女は、その澄んだ瞳の如く、たいへん鋭い判断力をお持ちです、
貴女がこうして、お命じになるので、
貴女の愛を勝ち取るべく、僕の価値についてお話することにしましょう⁽¹¹⁾、
数々の理由から確信しています、
この取るに足りない恋敵より、僕の方を愛していただけでしょう。

ダフニス

僕の期待は薄れ、あらゆることが僕を絶望させます、
貴女に気に入られるのに価値が要するというなら。
貴女に釣り合うものなど何もないのです、たった今気に入られるのに
根拠など持ち合わせていません、愛しかないのです。

フィレーヌ

僕にとって貴女のお力が如何に強力か考えてみてください
ドリーズ亡き後、僕に恋をさせたのです！
何度も、もう恋はすまいと誓っていましたが、
それなのに、貴女の美しい瞳が、その誓いを破らせたのです！

ダフニス

僕はかつて、ただ一つの恋に燃えたことしかありません。
その恋は貴女の魅惑的な眼が僕の心にもたらしたものの。

(11) フィレーヌは愛を「価値」« *mérite* »への見返りとみなすが、ダフニスの反論は、愛と「価値」が無関係であることを示す。

二度、愛することのできる者の誠実さなど疑わしいものです、
僕の愛は、僕と共に生き、果てねばなりません、
そして、貴女の姉上のように、もし貴女が遭難なさるようなことがあれば、
死が、僕が浮気者となるのを決して許さないでしょう。

フィレーヌ

それに、立場をわきまえるなら⁽¹²⁾、貴女は僕を選ばれることでしょう、
貴女にとって最も身近なご親族が、僕の望みを認めておいでです。

ダフニス

もし僕が、過ぎた幸運から貴女に選ばれるなら、
その幸せは、貴女ご自身以外の何ものにも拠らないでいてほしいです。

フィレーヌ

貴女は、僕を夫とすることで、名声も得られることでしょう、
僕の生まれた一族は、この地では名家です。

ダフニス

僕の生まれた一族に、かつて栄誉を得た者はありませんでした、
ですが、もし、そこへ貴女がいらしたなら、僕らは名誉ある一族となるでしょう。
彼の約束する名声は、貴女の心を殆ど動かすはずもありません、
名声を受けるのではなく、与えることが、貴女の役割なのです！

フィレーヌ

僕は貴女の嫌悪に値するほど不器量でもありません、
先日、泉に自分の姿をもう一度、映してみました。
自惚れでなく、なかなか満足のいく道理がありました。
そこに映った僕は、醜過ぎることもなければ、不恰好に過ぎることもありませんでした。

ダフニス

僕の醜さは、僕の願いを阻むものではありません、

(12) 原文 « La bienséance encore vous porte à me choisir » の « bienséance » は、ここでは親の意志に従うこと。

田園劇において親は子にしばしば望まない結婚を強要するが、それを受け入れるのは子の義務とみなされる。

もし僕が美しさに欠けるなら、貴女が、その原因です。
僕らは同い年です、道理から言えば
僕らは同じ時に創られました！
自然は類稀な傑作を生み出さんとして、
最も豊かな恵を、貴女に惜しみませんでした！
無慈悲な自然が、僕のことに思い至ったのは
貴女の栄光のため、自らの宝を使い果たした時に過ぎません！
自然は、貴女に目をかけたために、僕には残酷だったのです。
貴女が今ほど美しくなければ、僕はもっと美しく生まれついていたことでしょう！

フィレーヌ

道理のわからない者たちは、そう信じるでしょう、
彼は口ばかりですが、僕には実質が伴います。
もし貴女が富を愛されるなら、運命が僕に情けをかけ、
財産については、この地で僕を上回る者は誰もいません。
僕は村においては数々の家を、野においてはいくつもの羊の群れを持ち、
二十本の鋭い犁で土地を耕させます。
財産があり過ぎて、ついには数え上げるのも煩わしいほど、
運命の女神のように、どうぞ僕に目をおかけください。

ダフニス

運命の女神が正当な業をなすことなど決してありません⁽¹³⁾、
その敵意であれ、厚意であれ、見境ありません。
貴女はたいへん聡明でいらっしゃるので、
見境のない女神の判断に従おうなどとはお考えにならないでしょう。
女神は美德を憎みますが、貴女はそれを重視されます。
つまり、運命の女神は盲目で、貴女はそうではないのです。

フィレーヌ

もし、ここで、貴女が僕の方を選ばれるなら、
僕の感謝の印をご覧になるでしょう。
僕が手塩にかけて育てた小鹿を、貴女に差し上げることをお約束します、
この小鹿は、貴女に贈るために今まで取っておいたものです。

(13) 運命の女神は盲目で理性にも法にも縛られず、気まぐれに善人を罰したり、悪人を援護したりする。

ダフニス

どのような贈物も、僕にとっては逃げ場になりません、

審判者を買収するのは、劣勢な者のすることです。

僕は、自分に都合よく判断させるものを、何であれ貴女にお約束することはありません、

愛をお捧げした僕は、差し上げられるものなど何ともありません。

クロミール

できることなら、貴方がたのどちらにも、ご満足いただけるようにすべきでしょう。

フィレーヌ、誠実な愛の報いとして、

私の花冠で貴方の頭を飾ってください⁽¹⁴⁾。

フィレーヌ

ああ、何と嬉しいご好意！

ダフニス（傍白で）

ああ、辛過ぎる仕打ちだ！

クロミール

ダフニス、貴方の花輪を私にくださいますか⁽¹⁵⁾？

身につけておくつもりです。

ダフニス

ああ、何という栄誉でしょう！

クロミール

それでは。

(14) 贈物の見返りとして愛を求めるフィレーヌに贈物をするので、クロミールは自らが「与える者」となって、フィレーヌが課そうとする見返りの義務を無効にし、「与える者」の優位を主張してきたフィレーヌの勝利を否定する。

(15) クロミールは、贈物を「劣勢者による審判者の買収」とみなすダフニスに贈物をさせることで、ダフニスを敗者にする。クロミールの審判は、フィレーヌとダフニスの主張に則って、どちらも勝者でない、即ち、2人のどちらにも好意を持っていないことを示す。

ダフニス

ご一緒しますか？

クロミール

結構です、あまり怖くありません。

この時間なら、そこかしこに羊飼いたちがいます。

〈第6場〉 ラ・フルール、ダフニス、フィレーヌ

フィレーヌ

今や、誰があの娘の気に入っているか、わかったらう？

ダフニス

わかるに決まっている、あの女の答えはとても明快だ。

フィレーヌ

各々、あの娘の望みがわかったのだから、
僕たちの取り決めに従おうではないか。

ダフニス

そうしよう。

フィレーヌ

僕一人に愛させてくれ、あの娘がそう望んでいるのだから！

ダフニス

おいおい、ふざけるのはよせ、君が笑える立場ではないのだよ、
変りなよ、よそでもっと優しくしてくれる女を探せよ。

フィレーヌ

何だって、よそで幸運を探すべきなのは君だろう？

ダフニス

クロミールが愛していることを見せたのは、僕一人だ。

フィレーヌ

わからず屋のふりはよせ。

ダフニス

君こそ、よせ！

フィレーヌ

常識から言えば、僕に財産の一部をくれる人は
その人が、僕から財産を奪う場合よりも、僕のことを愛しているはずだ⁽¹⁶⁾。

ダフニス

受け取る者に対して、与える者は優位に立っている、
与える者は何も負わないが、受け取る者は恩義を感じるものだ。

フィレーヌ

しかし、牧神パーン⁽¹⁷⁾が僕らを愛してくださる時、よく知られている通り
パーンは僕らに情けをかけてくださり、僕らから何かを奪うことはない。

ダフニス

牧神パーンが僕らを愛してくださる時、僕らの貢ぎ物を受け取ってください
同じように、クロミールは僕の花輪を受け取ってくれたのだ。

フィレーヌ

君に対する僕の優位は明らかだ、
結局のところ、僕に勝者として冠が授けられたのではないか？

ダフニス

その間違っただけの考えによって、君の自惚れは僕を侮辱している⁽¹⁸⁾、

(16) クロミールの審判を受けて、フィレーヌの主張は反転する。一方で、財産を愛の証とみなす点は変わっていない。

(17) ギリシアの牧羊神。もとはアルカディア地方の牧人と家畜の守護神。葦の枝で作った笛シュリンクスと羊飼いの杖、花輪、松の枝を持った姿で表される。家畜の繁殖、狩猟の収穫を掌る。

(18) フィレーヌは自分の財産を誇り、富ゆえにクロミールの愛を得られると考えているが、ダフニスは、そのようなフィレーヌに愛の論理は理解できないことを指摘している。

僕は主人の証を持ち、君は奴隷の証を持つ。

僕らの花飾りは縄に過ぎない、

僕の縄はクロミールを縛る、君はあの女の縄を身につけて縛られる。

フィレーヌ

君の花輪は緑色だった⁽¹⁹⁾、みたところ

あの娘は、君から花輪を取り上げて、君から希望を奪いたいようだ。

ダフニス

そうやって、あの女は、僕に幸福を約束したいのだ、

あの女の愛を勝ち取ったのに、何を望むことがある？

成功は、その動機となった希望を失わせる

人は手に入れたものを、それ以上、望むことなどない、

では失礼しよう、もし君が、再びクロミールに会ったなら、

君は恥じ入りながら、あの女^{ひと}の選択を、もっとよく知ることになるだろう！

〈第7場〉 ラ・フルール、フィレーヌ

フィレーヌ

僕らは二人共、間違っている、まやかしの結婚の希望が僕らを惑わしている、

僕らの疑問を晴らすどころか、クロミールは僕らをはぐらかしている。

恋人二人を引き留めておくだけの値打ちが自分にあると思って、

一人に決めようとしなないのだ。

僕の心が今なお、その遺灰を愛おしむドリーズは、

もっと正当で優しい気持ちを持っていてくれたものだ！

あの女^{ひと}が死んでからも、あの女^{ひと}を愛すべきだったのだ、

いや、むしろ、あの女^{ひと}亡き後、生きていくべきではなかった！

おかしいな！ 眠くてしかたがない、

あの女^{ひと}の魅力が僕^{ひと}の感覚をまどろませ、僕の悲しみを和らげてくれる！

何ということだろう、僕のような境遇において感じるものが、

死の女神の兄弟⁽²⁰⁾からの贈物である眠気以外にないとは。

(19) 緑は希望を表す。

(20) 眠りの神ヒュプノスは死の神タナトスの双子の兄弟。タナトスはローマでは女神モルス。

(フィレーヌは眠りこむ。)

〈第8場〉 ラ・フルール、セルヴァージュ、フォレストン、モンタン、ドリーズ、フィレーヌ

セルヴァージュ

俺たちの恋敵がいるぞ、あの木陰で眠りこけてやがる、
やっちまおう。

フォレストン (セルヴァージュの両手を掴む。)

落ちつくんだ、先手を打っておこう、
こいつが起きた時に、反撃を封じられるように。
まずは、こいつの両手を縛るとしよう。

セルヴァージュ

よしきた。

モンタン

フィレーヌは一人きりです、何もご心配なさらず、お近づきください、
お二人の邪魔にならぬよう、私は下がりますよ。
(モンタンは退場する。)

ドリーズ

復讐してやりましょう、この瞬間にも、
あの不実な人に、致命傷を与えてやらねばならないわ。
行きましょう、まあ、何という光景でしょう？ あの人を殺そうとしている！
卑劣な者たち、下がれ、さもなければ私の怒りにふれることになるぞ。

フィレーヌ

何ということだ、ここは何処だ、何事だ！

セルヴァージュ

こいつの怒りから逃げるとしよう、

ここにいれば、攻撃をくらうばかりだ。(21)

ドリーズ

すっかり遠くへ行った、縄をお解きます、
羊飼いのお方、貴方は自由の身ですよ。

フィレーヌ

ええ、貴方は僕の命の恩人です！

そして今、僕の切なる願いは、ただ
貴方のために命を捧げる術を見つけることです！

ドリーズ

何て人だ、これからその方法を見つけるがよい、
できるなら身を守りなさい。

フィレーヌ

いいえ、僕は死なねばなりません！

もし貴方が僕の命をお望みなら、そうせねばなりません、
僕の命を救った手に、それを奪う権利があるのです！

ドリーズ

貴方の命、奪うよりも、勝ち取ってやりたいものだ、
貴方が応戦するのであれば、私にはありがたい。

フィレーヌ

いいえ、貴方の攻撃に、この身を差し出します、おや、驚いた、何ということだ！
ドリーズの顔立ち、ドリーズの眼差しではないか？

ドリーズ

同じ顔立ちをしていても、心は違うわ、
私を掻き立てるのは、愛ではなく恨み、
そう、私はドリーズだけれど、怒れるドリーズなのよ、

(21) ト書はないが、ここでセルヴァージュとフォレストンは退場する。

貴方の心を勝ち取るのではなく、貴方の心の臓を抉り取ることを望んでいるの⁽²²⁾。

フィレーヌ

いいでしょう、さあ、僕の死は当然の報いです！
僕は随分と悔やんでいます、僕の罪はそれ以上に重い！
貴女のために生きるという希望を失った僕の心は、
貴女の手にかかって死ぬことに、最後の幸せを見出しています！
さあ、刺してください！

ドリーズ

どれほど恨みに駆られても無駄ね、
そんな気力などないもの、恩知らずな人、私にはできない！

フィレーヌ

これほど美しい手にかかり、死ぬべきではありませんね、
自らの手で、自分を罰するべきです！

ドリーズ

いけません、止めて、無慈悲な人！
恩知らずのフィレーヌは憎いわ、でも、怒りに駆られているのに、
悔やんでいるフィレーヌは嫌いになれないの。

フィレーヌ

それは不実な男に対して、優しさに過ぎるというものでしょう、
おや、貴女の妹君は、何を慌てて、やって来るのでしょうか？

〈第9場〉 ラ・フルール、フィレーヌ、ドリーズ、クロミール、ダフニス

クロミール

かつて、このような無礼が語られたことがあるでしょうか？
おぞましい二人のサテュロスが、無理やり

(22) 原文 « Qui veut non te gagner; mais l'arracher le Cœur » の « Cœur » は、抽象的な「心（愛）」と、具象的な「心臓」の二重の意味で用いられている。

直ぐそこで、たった今、私を連れ去るところでした
あの時、神々がお遣わしになったダフニスがいってくれなければ！

ダフニス

羊飼いのお嬢さん、安心してください、あの卑劣な者たちは逃げて行くところです。

クロミール

貴方がいなければ、どんな不幸に陥っていたことか！
私の命と名誉が守られたのは貴方の愛による奉仕のお陰です。
貴方に身をお捧げしても、貴方に対してそれほどまでの恩義⁽²³⁾がないわけではないでしょう。

ダフニス

貴女が僕に恩義を感じるなど何ともありません、比類なき女^{ひと}！
務めを果たしただけの者に、恩を感じる者などいません。
それに僕は貴女から、このような行き過ぎたご好意をいただいています
自分に相応しくない褒美を与えられる者のように、
それにしても、フィレーヌは失恋から死んでしまうでしょうね。

フィレーヌ

僕たちのどちらが羨望に値するだろうね。
この愛すべきお方が僕に愛を誓ってくださって、
僕は君と同じくらい幸せで、君よりも満足しているのだよ。

クロミール

まあ、男の人に、貴方の心が捕えられることなど、どうしてあるでしょう？

ドリーズ

男の羊飼いの姿をしているけれど、ドリーズです。

クロミール

ドリーズお姉さま、何ということでしょう！ どんなかつてない奇跡が、

(23) クロミールが、ダフニスへの「*devoir*」[「恩義」]から愛を受け入れると言うと、ダフニスは自分の行為は恋する者としての「*devoir*」[「務め」]であると答える。ダフニスの返答は、「*devoir*」の意味を読み替える言葉遊びを通して、愛は見返りを求めないものであることを示す。

お姉さまが波に呑まれるのを救ったのですか？

ダフニス

この場所は今や陽差しがこたえます、
ドリーズの身に起ったことについては家の中で何うことにしましょう。
そして、皆で幸せな日のために準備をしましょう
その日ついに僕たちの愛は結婚によって報われるのです。

二幕の田園劇の終わり

第三幕「ガラスの博士」*Le Docteur de Verre* 喜劇

担当：高安 理保

【解題】 第三幕では、スペインのトレドを舞台とする喜劇が演じられる。フランスでは、1640年代、ドゥーヴィルが火付け役となってスペイン・コメディアに依拠した筋立て喜劇が流行し始めた。1658年にモリエールがパリに帰還して以降は喜劇の主流がパリの風俗に根差した芝居に移っていくが、本作が上演された1655年当時はスペイン物の人気が続いており、ジョドレヤド・ヴィリエに代表されるグラシオーツが活躍していた。作者不詳の笑劇『恋する博士』*Le Docteur amoureux* (1652年) やトリスタンの喜劇『寄食者』*Le Parasite* (1653年) などが、周辺の作品として挙げられる。

主な出典は、セルバンテスの『模範小説集』*Novelas ejemplares* (1613年) に収められた『ガラスの学士』*El licenciado Vidriera* がまず挙げられる。ただし、キノーはセルバンテスから学士の狂気という設定を借りたのみで、むしろ同時期のビュルレストク作品群やラブレーから大いに影響を受けている。老いて醜いながらも恋をする博士の人物像は、セルバンテスにおける学士とは似つかず、スカロン『マタモール隊長の機知』*Les Boutades de Capitaine Matamore* (1647年) に登場する術学者ボニファスや、シラノ・ド・ベルジュラック『術学者愚弄』*Le Pédant joué* (1645年) のグランジェの系統に連なる。

幕全体を通して観客の知的好奇心を刺激する笑いがふんだんに仕込まれている。まず2場では、句切りの位置をずらして読むだけで意味が反転して聴こえる手紙があるが、これは句読点を控えめにして書くサロンの流行を応用的に取り入れたもので、舞台における朗読の効果をねらった洗練された楽しみになっている。また、5場では、ラブレーの登場人物を彷彿させる対極的な二種類の台詞回しが並置され、コレージュの術学的な学生たちが滑稽に描き出される。片や難解で装飾過多、片や簡潔過ぎる口調の対比が印象付けられた後、6場でいよいよ博士が登場する。博士の狂気は、ガラス化した自分の身体が破壊されたと思ひ込み、甚だしい恐怖を覚えた時に極限に達するが、この、現世を地獄だと認識する錯乱のモデルは、コルネイユ『メリット』*Mélite* (1630年) のエラストやロトルー『憂鬱症患者』*L'Hypochondriaque* (1631年) のクロリダンに認められる。中央に位置する

この幕で、狂者の目を通して描かれる地獄の情景は、一種の劇中劇の様相を帯びており、作品全体と入れ子構造を成している。ここでの博士の台詞には古い学術用語から砕けた擬音語まで様々な知的レベルの言葉がちくはぐに組み合わせられ、これがひとりの人物に内在する矛盾を表し、狂気の特徴付けている。また、地獄と現世のふたつの次元で意味のとれる言葉遊びが多用されており、現世における人物の特徴や博士との関係性が、地獄でのキャラクター設定にそのまま投影されている。さらに、堂々巡りする結婚相談は、ラブレーに範をとっているが、地獄の審判という設定と組み合わせあって、原作にはない皮肉な意味合いが付け加わっている。最後に、博士が生身の人間として意識を取り戻した後、偉人たちの地獄での暮らしぶりがカタログ的に列挙されるが、これについては本作初演と同年に出版されたスカロンの『戯作ウェルギリウス』 *Le Virgile travesti* 第6の書や、シラノの20番目の『風刺書簡』 *Lettres satiriques* に類似の描写が見出せる他、元を辿ればラブレーやルキアノスにまで遡れる。現世と地獄で権力者と賢者の地位が逆転しているだけでなく、歴史や伝説を紐解いてみれば、人物と充てがわれた修飾語句にはすべて関連性があることがわかり、観客に謎解きのような楽しみを与える箇所になっている。

このようにキノーは、観客にもなじみ深い諸原典や日常のシーンからエッセンスを取り出し、アレンジを加えつつ自由に組み替えて凝縮することで、新しい面白さを備えた彼独自の喜劇として『ガラスの博士』を仕立てている。

【あらすじ】 イザベルがテルサンドルへの手紙を侍女に託す。強いられた結婚を恋人に阻止してほしい考えである。出立を急ぐマリーヌ、パンフィルと鉢合わせしてしまう。彼には金持ちの博士との結婚に反発する娘の気持ちがわからない。結婚ではなく年老いた相手が気に入らないのだとマリーヌが説明するが、パンフィルは手紙を掠め取って読み、娘と若い恋人との関係を疑って怒る。マリーヌは手紙が姉へ充てたものと信じ込ませる。パンフィルが立ち去り、マリーヌが主人に経緯を話していると、博士の書生に扮したテルサンドルとその召使いがやって来る。パンフィルが狼狽した様子で戻って来る。博士が発狂し、身体がガラス化したと思いついでいるというのだ。小使らが奇妙な言葉遣いで博士の状態を説明していると、藁にくるまれた博士がやって来る。藁を剥ぎ取られた博士は気絶してしまう。意識を取り戻すと、博士は体が割れて精神が地獄に堕ちたのだと錯覚し、周りの連中を冥界の住人と見做して問答する。博士は再び意識を失い、目覚めると、生身で生還したことを喜んで、地獄の情景を語った末に去ってしまう。テルサンドルが正体を現しイザベルに求婚すると、パンフィルは喜んで受け入れる。

【三幕の登場人物】

イザベル	Isabelle	パンフィルの娘
マリーヌ	Marine	イザベルの小間使い
パンフィル	Panfile	イザベルの父
テルサンドル	Tersandre	イザベルの恋人、書生の格好をしている。

ラゴタン Ragotin テルサンドルの召使い、同じく書生の格好をしている。
博士 Le Docteur イザベルに恋している。

舞台はトレド

〈第1場〉 イザベル、マリーヌ

イザベル

手紙が出来たわ、任せたわよ、
テルサンドルに手渡してちょうだい、
わかっているわね、彼への頼みごとを書いたの、
私と結婚することになっているあの博士（はかせ）の思惑を妨げてくれるようにって。
もし出かける時にお父さまに出くわしたら、
今教えた秘策を思い出さない。

マリーヌ

もう結構ですわ、私は幼い頃からわきまえていましたもの、
うたぐり深い老人を欺く術を。

イザベル

もう少々お聞きなさい、あの人にはよく考えて話すのよ、
昨日私に手紙を書き忘れたのは大きな過ちだった、
私の悲しい結婚はますます急ぎ足で迫っている、
それに心遣いの少なさは愛の少なさの現れなのだと。

マリーヌ

お戻りください、それ以上おっしゃる必要はありません。

イザベル

とりわけ私の結婚についてよくよく彼の考えを探るのよ。
（イザベル、部屋に戻る。）

マリーヌ

お行きください、こういう役回りで首尾よくやるために

私はそれほど教えを必要としておりません。

早く行きましょう。まあ、あのじいさんが痰を吐いているのが聞こえるわ、手紙を持っていることを知られては困るわね。

(彼女は手紙を胸元に隠す。)

胸元から手紙を盗みとれるものなら、相当に手先が器用ということになりましょう。

〈第2場〉 パンフィル、マリーヌ

パンフィル

マリーヌ、一言いいかね。

マリーヌ

旦那様、どうなさいました？

パンフィル

もちろん知っているだろうが私はお前に全幅の信頼を寄せている、教えておくれ、我が娘は何をしている？

マリーヌ

お嬢様はいつものお祈りをなさっています。

パンフィル

まったく、それなら私はとても嬉しいよ。この上なく良いことだ、日が昇るなり神々に感謝するというのは。これから神殿へ行って祭典に参列する⁽¹⁾としよう、娘の神聖な礼拝を邪魔してはいけないからね。

マリーヌ

それはようございますね。

(1) 当時、宗教的理由から、キリスト教に関する語彙を劇作品（とりわけ喜劇）において用いることは禁じられていたため、異教の語彙を借用している。「神殿」は「教会」を、「祭典」は「ミサ」を換言したものである。パンフィルの台詞の随所にこの類の借用が見られるが、この言葉遣いがこの人物の古代かぶれで銜学な性格を印象付けている。

パンフィル

だが、マリーヌよ、行く前に、

娘の密かな望みを教えてはくれないか？

お前も知っているように私はある男を娘の夫にしようとしている、

アテネにもローマにも肩を並べる者のないような男だ。

彼は学者だが、似ても似つかぬのだよ、

ネズミのように貧しく、ありふれた学者連中とは。

心得ているのさ、取っつきにくい人の心をも絆してしまう、

口で金言を吐くようにして手金にものを言わせる⁽²⁾術を。

こんな好機に、何が原因で我が娘は

あんなに激しく結婚に反発するのだ。

もしやあの子はひどい熱に浮かされて

姉のようにウェスタの巫女⁽³⁾たる誓いを立てたのではなからうな？

マリーヌ

正直に申し上げますが、考えられませぬわ、

お嬢様が今までに純潔の誓いを立てたなどとは。

それに旦那様の決めたことにお嬢様が反発するのは

結婚のせいというよりも夫のせいなのです。

夫になろうというかたは醜い老いぼれで、

心にあるのは情熱の炎よりもむしろ冷たい氷なのです。

こんな人がうら若き心の琴線に触れるわけがありません。

若い娘が嫁に欲しいと求められる時、

そんなお申し出はいつだって魅力的です。

でも往々にしてお申し出をくださる相手が気に入らないのです。

もし旦那様がテルサンドルさんを拒んだりなさらなかったなら、

苦もなくお嬢様を結婚に応じさせることができたでしょうに。

パンフィル

博士の方が金持ちなのだ。

(2) 「金言（立派な言葉、名言）を吐く」ことを意味する成句（parler d'or）をもじった表現になっている（« Parler d'or de la main, ainsi que de la bouche »）。

(3) 「修道女」の意。註1参照。

マリーヌ

ええ、でもお嬢様が結婚することになっているのはあのかたのお金ではなくて、年老いた身体の方なのですよ。

パンフィル

しかし、恋に浮かされて甘い言葉をささやくあの若造に、娘のほうも秘かに熱い想いを抱いているということはあるまいな？

マリーヌ

そんな疑いを抱くなんて、旦那様はお嬢様を大いに誤解しておりますわ、娘さんは大変賢いのですよ、私の教えに従っているのですから。

パンフィル

お前は誠実な人間だと思っているから、信じざるをえないな。しかしその紙は何だね？

(手紙を見遣る。)

マリーヌ

何でもありませんわ。

パンフィル

見せておくれ。

マリーヌ

だめ！ お考えはわかりますのよ、近寄って胸に触るおつもりでしょう。あなたのお人柄が知れていないとでも？

パンフィル

なんと？

マリーヌ

何をおっしゃっても無駄ですわ、触らないでくださいませし。

パンフィル
しかし……

マリーヌ

冗談はよしてくださいな！

パンフィル
その紙は恋文に違いないと見た。

マリーヌ
私の求婚者からですわ。妬いていますの？

パンフィル
行け、浮かれ女風情が、もういい、私は神殿へ行く。
(傍白)
あの女の動きはなんとも疑わしい、
一旦外に出てから不意打ちしてやろう。

マリーヌ
あの人、たいそう満足気に出ていくわ。
さてと、大事な手紙は別のところにしまっておきましょう。

パンフィル
ゆっくり戻ろう、そうすればきっと
あやつの手から紙を剥ぎ取れるはずだ。

マリーヌ
手紙はくしゃくしゃ、綺麗に折りたたまなくちゃ、
あの間抜けなじいさんに悪知恵は働かないのね。

パンフィル (手紙を奪って)
お前が正直か、それとも嘘つきか、確かめよう。

マリーヌ

何ですって、私の手紙を開けるおつもり？

パンフィル

ああ、だが悪いようにするつもりはない。

宛名書きもサインもない手紙だが、
わしには娘の筆跡だとわかる。
話せ、誰にこのとんでもない手紙を持っていくというのだ、
イザベルの代わりに？

マリーヌ

巫女の姉さんにですわ。

パンフィル

テルサンドルのほうだろう。

マリーヌ

ああ、そんな考えはよしてくださいな。

パンフィル

読めばはっきりわかるだろう。

(手紙⁽⁴⁾を読む。)

あなたが手紙を書く心遣いを欠いたとて、私は尚も心惹かれている。美德へ従順であることが一番いや。まったく幸せじゃない？ 女の子に富を愛する親がいなかったなら。ひとは博士のじいさんと結婚するよう私をせき立てるけど、無駄よ。結婚に同意しないという誓いは、すべからく果たすわ。父の望みは、私がああの年老いた恋人を受け入れることよ、嫌だわ。わけもなく、私を愛する人は結婚を止めようとするはずよ。

それみたことか、卑怯者め、今となっても厚かましく
手紙は巫女に宛てたものだというのか？

(4) 句読点の位置を変えるだけで同じ手紙が二通りの意味に読めるという原文の形式を日本語で再現するために、原文の意味合いを尊重しつつ翻案をおこなった。尚、戯曲では句読点が打たれているが、実際の手紙には句読点がない設定である。

娘はお前の手でこれを恋人に送るのだ。

マリーヌ

大きな勘違いですわ、旦那様、断言します、
あなたさまは読み違えております、命を懸けてもいいわ。

パンフィル

なんと！ これほど甚だしい厚かましさがあったものだろうか！

マリーヌ

私を誰だと思っているんです？ お願いですから、言い方には気をつけてくださいな、
旦那様、私には名誉がありますわ。

パンフィル

わしには、聡い目があるのでね。

マリーヌ

その大きなお眼鏡には気に入らないでしょうけれど、
あなたさまの視界は曇っていらっしゃいますわ、
もっと近くでご覧になって、意味が変わってくるでしょうから。

パンフィル

この嘘つき女は私を苛立たせるつもりだな。

マリーヌ

旦那様は私たちに極めて不当な仕打ちをしていらっしゃいます、
私は自分の仕えている人をよく知っておりますから。

パンフィル

それなら、お前が読んでみなさい！

マリーヌ

これが恋人ではなくただ姉に宛てた言葉で
あなたさまはいわれもなく私を非難したのだと、
もし認めさせることが出来なければ、

私は未婚のまま死ぬことになってもしようがありません。
これほどの誓いの後でなら信じてくださるでしょう。

パンフィル

どうだかね、早く読みなさい。

マリーヌ（読む。）

あなたが手紙を書く心遣いを欠いたとて、私は尚も心惹かれている、美德へ。従順であることが一番。いや、まったく幸せじゃない。女の子に富を愛する親がいなかったなら。ひとは博士のじいさんと結婚するよう私をせき立てるけど。無駄よ、結婚に同意しないという誓いは。すべからく果たすわ、父の望みは。私がああ年老いた恋人を受け入れることよ。嫌だわ、わけもなく私を愛する人は。結婚を止めようとするはずよ。

パンフィル

なんということ、どうなっているんだ、一語たりとも変わっていないのに、最初とは真逆の意味になるなんて？

マリーヌ

ほら、先入観に囚われていたんじゃないやありませんこと？

パンフィル

点書き落とされているせいで思い違いをしてしまったようだ。
この頃の若い娘たちには野暮ったく感じられるらしい、
あちこちに句読点を打つような書き方が。

マリーヌ

恐れ取り乱してしまいがちな性分が
仇となってそんな間違いを犯したのですわ。
何度も言っておりますが、お嬢様はお心立ての良いかたなんですよ、
私を侮辱し、お嬢様を疑うなんて、
悔しくて胸が張り裂ける思いです。

パンフィル

マリーヌ、すまない、
もう二度とお前を疑いはしないと誓うよ。

マリーヌ

とんでもない過ちでしたこと！

パンフィル

ああ、その通りだ。

マリーヌ

手紙を返してください、旦那さま、時間がないの！

パンフィル

これは私が届けさせるよ。

マリーヌ

そんな必要はありません。

パンフィル

行きなさい、後のことは私の召使が代わってやるから。

その時間と賢さを上手に使って

お前の主人に博士との結婚に向けて心の準備をさせておいてくれ。

マリーヌ

でもお嬢様を急がせる必要が？

パンフィル

ああ、私に代わって伝えておくれ、

結婚の日取りは遅くとも明日だと。

マリーヌ

なんて恐ろしいこと、こんな知らせをイザベルお嬢様に

届けたら、どんなお叱りを受けたものかしら。

〈第3場〉 イザベル、マリーヌ

イザベル

お父さまが起きていたらご挨拶するとして、
行きましょう。あらどうしたの、マリーヌはもう帰ったの？

マリーヌ

帰るところか、出かけてもおりませんわ、
あのもうろく爺さんにしてやられたんです。

イザベル

手紙はどうしたのよ？

マリーヌ

無理やり取られてしまいました、
でも教わった秘策のおかげで、
意味を変えて読み聞かせてやりましたわ。

イザベル

上首尾ね。

マリーヌ

笑っている場合じゃありません！
明日には博士と結婚するよにというのが、
あの老人の命令なんです。

イザベル

なんて血も涙もない命令なの、
テルサンドルに知らせることができたなら……！

マリーヌ

あの人が知ったとしても、何を期待できましようか？
恋の炎の丈は恋人の心遣いからうかがえるものですが、
あの人はお嬢様を蔑ろにしていますもの、それほど愛してはいらっしやらないんですわ。

イザベル

マリーヌ、それなんだけど、実は疑う訳があるのよ！

マリーヌ

声を抑えてください、どこかの書生さんが近くで耳をそばだてているようですわ。

〈第4場〉 テルサンドル、イザベル、マリーヌ

イザベル

何かお探しですか？

テルサンドル（書生の格好をしている）

美しい人、誰しもの心を打つおかた、

お目にかかれて幸いです、他に探し求めるものなどありません。

あなたを想い死ぬほどの苦しみに苛まれている博士が

ご様子を知りたいと気を揉んで私を寄越したのです、

もっと幸福でもっと甘美な日があなたに訪れることを願っておられます、

愛があのかたをあなたにあてがう準備をしている今日という日よりも。

マリーヌ

書生にしてはなかなか口がお上手ですこと。

イザベル

この目が欺かれているのでなければ、これはテルサンドルだわ。

テルサンドル

あなたの美しい眼はいつも確かな証人だ、

その聡明な輝きを欺くことなどではしない。

イザベル

包み隠さずに、言ってくださればよかったんだわ、テルサンドル、

心遣いが足りないなんて不満に思うのも訳あってのことよ、

心変わりしたんじゃないかと疑ったもの。

テルサンドル

変わったとすればそれは衣服のみ、
お美しい人、私を燃え上がらせる人！愛が
私の心を変えてしまっていたなら、こんな風に衣服を変えることはなかっただろう。
あなたへの想いに身を焦がしているあの博士が
召使いを新しく二人欲しがっていることを知り、
上手い策を講じて、うちの者をひとり引き連れて
首尾よくあの家の奉公人の列に加わったんだ。

イザベル

こんな良い話をもっと早く教えてくださればよかったのに。

テルサンドル

文字に書き起こせばその知らせが取り押さえられやしまいかと恐れたものでね。
博士はすぐに打ち明け話をしてきたよ、
それで私はやつが疑心暗鬼になっていることを見抜いて、
強烈な疑念を吹き込んで精神を掻き乱してやったんだ。
おや、お父上がいらっしゃるようだ。声色を変えよう。

〈第5場〉 パンフィル、ラゴタン、イザベル、テルサンドル、マリーヌ

パンフィル

泣け！泣きなさい我が娘よ。神殿から戻る途中、
前代未聞の不幸を知らされたのだ！
博士がそなたのために老後の名誉を失った、
愛にのめり込んだがために正気を失ってしまったのだ。
狂気に浮かされ、かなしいかな、
自分がガラスでできていると言い張り、壊されやしまいかと恐れている。
おや、この見慣れぬ召使いは何だ？

イザベル

博士のお遣いでいらしたんですよ。

テルサンドル⁽⁵⁾

しかるに、あのかたの冒されたる疾病を告知いたす者なり、
あなたさまの婿君とならんおかたは心気神経症たりて、
その精神はかつて神がかりとも称されしものなれども、
もはや思考するに能わず。

マリーヌ

なんてけったいな言い回しですこと！

パンフィル

ばかめ、だまっていられないのか？

コレージュ⁽⁶⁾ではこんなふう話すものなのだよ。
ご主人のことは非常に心苦しく思っている、お見舞いにくつもりだよ。

テルサンドル

されどもあなたさまの御屋敷にて待機されたし。
生命の源たる輝ける日の神が
弧を成す歩みを終えんとするに先立ち、
精神の錯乱するに逆らいて
かのおかたの肉体は此処に運送されておわすらむ。⁽⁷⁾

(5) 以下、諧謔的なラティニスム（ラテン語の語彙をフランス語化する語法）や学術用語が多用されるテルサンドルの台詞を、和漢混淆文ふうで訳した。この言葉遣いは、ラブレー『パンタグリユエル』（6章）におけるリムーザンの学生を彷彿とさせる。

(6) コレージュは、中世に学生の宿舎として大学に附設されたのが始まりだが、やがてイエズス会ら宗教団体が所有するコレージュも多く創られ、大学準備期間の学生も受け入れて、それ自体が教育施設としての性質を帯びるようになっていった。17世紀のコレージュでは文学（哲学）、文法、修辞学が教えられ、ラテン語教育はその核であった。

(7) 博士が家に運ばれて来る様子を、天の動きになぞらえて術学的に語っている。「生命の源たる輝ける日の神が / 弧を成す歩みを終えんとするに先立ち」« Avant que de Phœbus le Globe vivifique / Soit près de perficier son cours hémisphérique » とはすなわち「日が沈む前に」の意である。また、「錯乱」と訳した語（perturbation）は人間の精神のみならず天体の運行の「乱れ」を意味する語であるから、その文脈で考えると、「運送」と訳した語（translation）は天体の「運行」とも捉えられる。

パンフィル（ラゴタンを見て）

おや、こちらの青年は何者かな？

テルサンドル

我が親しき学友にして、
博士に侍りたるうちでも殊に名高き者なり。

パンフィル（ラゴタンに）

それで、博士は……

ラゴタン⁽⁸⁾

来たる。

パンフィル

気がふれているそうだが？

ラゴタン

したたかに。

パンフィル

だがどんな病状なのだ？

ラゴタン

甚だし。

パンフィル

案ずるべきは何であろうか？

ラゴタン

死。

(8) 「ラゴタン」の名が劇中で呼ばれることはないが、これは同時期に出版されていたスカロンの『ロマン・コミック』（1651-1657）における滑稽な登場人物の名前であり、道化役として意図的に名付けられたと考えられる。

パンフィル

なんて喋り方だ！

テルサンドル

かような様式は至りて古く、
かつてスパルタ式⁽⁹⁾と称されしものなり。

マリーヌ（傍白）

じいさんたらすっかりふたりに騙されているようだよ。

パンフィル

ご主人はどこにいるのかね？

ラゴタン

近く。

パンフィル

いつ会えるだろうか？

ラゴタン

すぐ。

パンフィル

こちらに上ってくる物音がするが？

ラゴタン

彼。

(9) ラゴタンの話し方はラプレー『第五の書』(27章)におけるフルドン会修道士を彷彿とさせる。ラゴタンはそれ実テルサンドルの召使いであり、道化役であるから、教養の要る難しい言葉は使えずに簡素な単語で会話を済ませているのであろうが、それを主人であるテルサンドルが、博士の侍従の中でも「名高き」人物による「スパルタ式」(«Lacédémonienne»、古代スパルタ人の自称「ラケダイモン」から)の優れた様式だと持ち上げているというアイロニックな状況である。

マリーヌ

あの人ふざけているみたいだわ、

藁にくるまれた籠に収まってやって来るなんて。

〈第6場〉 博士、パンフィル、イザベル、マリーヌ、テルサンドル、ラゴタン、二人の召使い⁽¹⁰⁾

博士（藁の衣を着ている）

私の妻となる人よ、そして義理の父となるおかたよ、
私の身体はすっかり変わってしまいました、
今や私は、月下のどんな物体も変質し得る
最後の素材に当てられたのです、
かねてから愛を警戒してきたのに、
愛が私に灯した火はあまりにも強大でした、私をガラスにしてしまうほどに⁽¹¹⁾。

パンフィル

ガラスでできてなんかいませんよ、いくらそうおっしゃっても、
何にもなりません。

博士

それじゃああなたの目が妙竹林なんでしょう。

パンフィル

しかしあなたはこうして喋っているじゃありませんか？

(10) 「二人の召使い」は3幕の登場人物一覧には載っておらず、籠に収まった状態の博士を運んできた端役だと考えられる。

(11) アリストテレスは、『天体論』の前半で永遠・不変のものとして天体を扱った上で後半を「月下の物体」« corps sublunaire » に割り、地上の変転する物質を構成する要素として地、水、空気、火の四元素を説いている。火は、地から最も遠い素材、「最後の」« ultime » 元素である。フェルチエールはガラスを「火を用いて作ることのできる最後のもの」とし、「あらゆる金属は火によって最終的にはガラスとなり、地そのものもまた、焼き過ぎたレンガがそうであるように、ガラス化する」と説明している。

博士

この声を作り出しているのは
閉ざされたガラスの中を動き回る精気なのであって、
身体が共鳴しているのです。しかし身体は大変脆く、
少しでもひびを入れられれば精気は漏れ出てしまうでしょう。

パンフィル

抱き抱えて、迷妄から引っ張り出してあげましょう！

博士

ああ、どうかおやめください、壊れてしまう！

パンフィル

是が非でも目を覚まさせてあげますよ！

博士

私の脆さに強敵など、
無用のことです。

パンフィル（抱きつきながら）

ほら……

博士

ああ、脇にひびが入ってしまった！

生命の水⁽¹²⁾が流れ出てしまう。

パンフィル

でも具合が良くないでしょう。

博士

誰よりも良い具合ですが。

(12) 古代医学において、命の根源を成すものであり、命が存続する理由であると信じられていた、想像上の体液のこと（« humide radical »）。この液体の枯渇がすなわち生命の死を引き起こすとされた。

パンフィル

出てきてください。

博士

ああ、ジュピテルがむしろあなたを混乱させますように。

パンフィル

堪忍してください。

博士

じゃあ何だっというんです、けしからん老いぼれ爺！
私がばらばらにでもなれば、あなたにはもっと具合が良いんですか？

パンフィル

ああもう、博士さんよ！

博士

ああもう、お義父さんよ！
近寄らないでください、あなたにもっと具合が良くなるようなことはないでしょう、
私はもうひび割れているんですよ、これ以上どうしようというのですか？

パンフィル（博士の藁の衣を剥ぎ取りながら）

あなたの勘違いを正してやろうというんですよ。

博士

畜生、卑劣者、抱きつかれたら、ああ、壊れてしまう！
婿破り⁽¹³⁾の冷血漢め、見ろ、私は死んでしまう！
（気絶する。）

テルサンドル（博士へ）

尊師、尊師、御命保ち留めたまえ。

(13) 「婿破り」と訳した箇所 « Gendrifacteur » は、「婿」(gendre)に「壊す」の意のラテン語 (*frangerer*) を名詞化して合わせた造語。

パンフィル

誰か水を持ってきておくれ、意識を取り戻させよう、
まだ脈は打っているから生きているのがわかる、
気絶から覚めるのも今少しといったところだろう。
取り戻した精神はすっかり衰弱しているようだ、
足取りはよろめき視線は怯えている。

博士⁽¹⁴⁾

ガラスの鞘からもぎ取られた私の精神は、
しかるに地獄へ移送されたものと見える。
私はすでに泥んこまみれのコキュトス川を突っ切って、
プルトンの闇の宮殿を前にしている。

テルサンドル

師は死者の国へ御身追いやられしものと思えり。

博士

おお神々よ！ 陰鬱な者どもでいっぱいこの広野はなんという有様だろう！
あちこちで相見えるはただ精霊や小悪魔、
狐火、闇の手先ども、妖精小僧や鬼小僧ばかり。

(ラゴタンに話しかける。)

おや、嬰兒殺しのタンタル⁽¹⁵⁾をはや見てとれり。
やつめ、口をおっ広げて、虚しくもぐもぐやっている！
鑑賞に堪えるものではないな、やつが鼻先の果物を
幾度も求めながら風ばかり飲み込んでいるさまは！
富も喜びもない不幸な大食漢よ、
教えておくれ、プルトンの邸宅へは、

(14) 以下、精神が地獄に堕ちたと倒錯している間、博士の台詞には学術的なラティニスムや学術用語と諧謔的でくだけた語の併置が見られ、狂気を印象付ける文体となっている。

(15) 神話におけるリディアの王で、人間の身でありながら神々の友人であったが、自分の息子を殺しその肉を宴の場で神々に供したために、奈落に落とされた。果物がたわわに実った樹に吊るされ、足元は沼に浸かった状態だが、かがめば水は引いていき、手を伸ばせば風が枝を煽り遠ざけるという罰を受け、永遠の飢えと乾きに苛まれることとなった。

どの道を行けばいい？

ラゴタン

長い。

博士

何を言わんとするのだ？

ラゴタン

何も。

博士

悪意でもあるのか？

ラゴタン

ない。

博士

だが私を知っているのかね？

ラゴタン

よく。

博士

私のことをどう思っている？

ラゴタン

気狂い。

博士⁽¹⁶⁾

(16) この博士の台詞は、ふたつの意味に取れる仕掛けがなされている。「堕ちた者」と訳した箇所「*âme damnée*」は、タンタルに向けて字義通りに「地獄に堕ちた魂」と読めるが、生きた人間を「悪人」と形容する熟語でもある。また、最後の行も、タンタルに向けた台詞でありながら、先生として自分の生徒を戒める言葉とも捉えられる。

なんと、墮ちた者よ、

我が叡智を冒瀆するのか、
単語ひとつで⁽¹⁷⁾ 答えるつもりか？
違うおしゃべりのやり方をよくよく教示してやろう。

ラゴタン

ああ！博士どの、どうかお赦しを、
召使いひとりに激昂なさらないでください。
これからは敬意を持って生き、
いつも複数の単語でもって⁽¹⁸⁾ お返事いたします。

テルサンドル

尊師、無慈悲なる心胆を持ちたもうなかれ。

博士（テルサンドルに）

ご命令に従います、高名なるラダマント⁽¹⁹⁾ よ！
我が命運はあなた次第なのです、地獄の司法官殿！
恐れ震えてあなたの黒き審判に敬意を表します。

パンフィル（博士に）⁽²⁰⁾

あなたの精神がこれほどまでに判断を誤ることがあるだろうか？

博士

ああ、プルトンどの、ご容赦ください。
私の振る舞いに驚かれたことでしょう、
あなたの御前にこそまずひれ伏さねばなりません。

(17) 原文 « monosyllabement » は「音節ひとつで」という意味の造語だが、日本語とフランス語では音節の単位が異なるため、ここでは意味合いを近づけるべく「単語ひとつで」と訳した。

(18) 原文 « polysyllabement » は「複数の音節で」という意味の造語。上に同じく意味合いを近づける訳を付した。

(19) 地獄の裁判官のうちのひとり。

(20) 初版では「パンフィルに」« à Panfile » となっており、間違い。1660年版で訂正されている。

イザベル

気付いてください、先生、あなたは勘違いに取りつかれています！

博士（イザベルに）

私に話しかけてくださるのですね、プロゼルピーヌ⁽²¹⁾さま！

イザベル

私のこともおわかりにならないのね。

博士

そんなことはございませんよ、

ジュピテルがあなたのお父ちゃまでしょう？

移り変わる夜の女神よ、

あなたは魔術の全能の力の源です。

人はあなたを様々な名で呼び祈りを捧げます、

大地の娘よ、地獄の女王よと、

あなたの愛らしい顔立ちに魅了されたプルトンが、

かつてあなたを力づくではるか遠く悪魔の巣窟へ⁽²²⁾連れ去ったのです。

マリーヌ

この人の話なんて聞かずに追い出してしまうべきですわ。

博士（マリーヌに）

なんだと？ してみるとまたもや私の邪魔をしに来たのだな、

蛇の髪をした不和の女神よ、

諍いの炎を煽っては⁽²³⁾、喜びを打ち挫く、忌まわしいメジェール⁽²⁴⁾、

(21) ジュピテルと大地の女神セレスの娘で、元は地上の乙女だったが、プルトンにさらわれて結婚し、共に冥府に君臨することになった。一年の半分を地上で過ごし、春をもたらす女神でもある。冥界のプロゼルピーヌの神格は天上の月の女神ルーナ、地上の狩りと純潔の女神ディアヌと混同され、この三相が魔術を司る女神ヘカテーと同一視されて、「三相のヘカテー」と呼ばれた。

(22) 「とても遠くへ」行くことを意味する熟語的表現 « à tous les diables » が用いられているが、字義通り「悪魔」の棲む地獄の意も読み取れるため、ふたつの意味を合わせた訳を付した。

(23) 人を指して比喩的に「扇動者」と言う時に用いられるが、具体的には大砲に火を点ける「導火竿」を意味する語が置かれている (« Boute-feu »)。次行と関連させてふたつの意味が汲み取れる訳を付した。

悪しき地獄の火付け役め！⁽²⁵⁾

マリーヌ

この人ったら目をぐらんぐらんさせているわ！
お嬢様、どうかこの狂暴な気狂いから助けてくださいまし。

イザベル

かっかしないてくださいな。

博士

どうかお恵みを、
供物として捧げることを誓いますから、
あなたさまのために特別に飾り付けた祭壇に、
子無しの雌牛にミミズクを二羽添えて。⁽²⁶⁾

パンフィル

勘違いに歯向かえば、勘違いがひどくなるばかりだ、
わざと話を合わせてもっと賢く勘違いを正してやることとしよう。

博士

それで、長らく話し合っておられましたが、
冥府の裁きを司る方々よ、どういう判決をなさったのです？

パンフィル

地上にあるそなたの身体へ戻らねばならぬ。

博士

私の身体ですと！しかし身体はまだガラスなのでしょう？

(24) 復讐の三女神のひとり。蛇の頭髮で、松明を手にした姿で描写される。

(25) 人を比喩的に「極悪人」と罵る言葉になっているが、前行との関連性も込めて、字義通りに「地獄の火」の意味合いを残して訳した（« Maudit tison d'enfer ! »）。

(26) 子供ができないことが「死」のイメージに結びつくことから、不妊の雌牛は冥界の神々への供物としては典型的なものであるが、ここでは、比喩的に「人付き合いを避ける陰気な男性」を意味する「ミミズク」と併置され、諧謔的な印象を与える組み合わせになっている。

パンフィル

いや、もうガラスではない。

博士

出発に際して恐れ多くも
もうひとつ大事なことを伺ってよろしいでしょうか？

パンフィル

ああ、話したまえ。

博士⁽²⁷⁾

ある小難しい性分の⁽²⁸⁾ 爺さんが
一粒種の娘っ子を私の嫁に賜らんとしておりまして、
その娘というのが大変香ばしい気晴らしをもたらしてくれるような、
非常に魅惑的な娘なのですが。

パンフィル

それなら、結婚すればよかろう。

博士

しかしもし結婚するなら、学問を辞めねばなりませんし、
妻を持つと、たくさんの気がかりができ、
いつも次々と心かき乱されるものですから、
恐ろしいのです。

パンフィル

それなら、結婚しなければよかろう。

(27) 以下の結婚をめぐる博士とパンフィルのやり取りは、ラブレール第三の書（9章）におけるパニユルジュからパンタグリユエルへの結婚相談のパロディである。本来ものを教える立場にある博士が助言を乞うており、さらに、結婚相談の相手がその実婚約者の父親であるという、滑稽な構造になっている。博士の台詞の節々に、パンフィルやテルサンドル、イザベルに対する本心、すなわち侮蔑や下心が表れている。

(28) 質の悪い液体で満たされているために「気性が安定しない」ことを示す（« cacochymique »）。

博士

結婚しないとすると、もしなにかしらの病気にかかったなら、
然るべき世話を受けられないことになります、
そんな時には妻が夫をあれこれ世話してくれるものなのに。
それが心配なのです。

パンフィル

それなら、結婚すればよからう。

博士

しかしもし病気が長引いたなら、妻はテルサンドルとかいう
つるし首にも値しないような生意気な若造と一緒に、
私を気遣うどころか私の死を願いやしまいか？
そう思うと苛々するのです。

パンフィル

それなら、結婚しなければよからう。

博士

しかしかといってひとりで生きるとなると、子も孫もなく死ぬことになるでしょう、
すると蓄えた財産を誰に託しておけば良いんでしょうか？
妻を持てば、自分らの世継ぎができるでしょうし、
そうすれば安心なんです。

パンフィル

それなら、結婚すればよからう。

博士

しかし結婚するとすると、あり得る話だけれども、もし
生まれてくる息子らの父親が誰か他の男で、
それなのにそんな重荷を抱え込まされる羽目になったなら？

気を病んでしまいます⁽²⁹⁾。

パンフィル

それならもう、結婚しなければよからう。

博士

従うべきはこの最後の助言だ、
良い選択をするには残された人生は短すぎるから。
それでは結婚は避けることといたします、黄泉国の神よ。
地上に戻ります、いざさらば、またお会いする時まで！

パンフィル

誰か椅子を持ってきておくれ。また意識を失いかけている。
娘よ、こんな下手な断り文句は信じてはならんぞ。
そなたの結婚の相手を見つけるのにはわしの骨が折れるだろうから。
今となっては、そなたの夫がテルサンドルだったらなあ。
こんな気狂いのためにあの男の申し出を撥ねつけるべきではなかったのに？
私欲にまみれてこんな大きな過ちを犯してしまった。
おや、博士が戻ったようだ、話を聞くとしよう。

博士

プルトンに讃美あれ、私は生身の人間だ。
お義父上となるはずだったおかたを、どうかジュピテルがお慰めくださいますように、
以前のお約束はなかったことにして、他の婿をお探してください。
私がたった今行ってきた、冥府の偉大なる神が、
私をこの世に戻す際にそう助言してくださったのです。

パンフィル

(29) 何かしらの打撃を受けること、すなわち金銭的・身体的損失や、恋に落ちたこと、飲み過ぎたことを言う表現 (en tenir) だが、ここでは「病気になる」の意を採った。博士は本当に恋の気がかりから精神を病んでいるのであって、もしもの話という形をとりながら、自分が現状に至るまでに思い悩んだ実際の内容を詳述していることになる。プルトン (パンフィル) とのやり取りを通して病の原因と向き合う過程を踏み、悩みに決着をつけたために、博士は元に戻ることができたと考えられる。

ああ、話を変えましょう！

博士

お考えはわかりますよ、
エリゼの園⁽³⁰⁾のことを知りたくてしょうがないのでしょう、
私に通ってきた、今しがた見知った場所のことを。⁽³¹⁾

パンフィル

そうではなくて……

博士

たしかに、驚かれることでしょうよ、
この世で帝国を支配する者は数あれど、
あそこでの彼らの有様を聞けば笑い転げることになりましょう。
強奪者のニヌス⁽³²⁾は靴下を修繕し、
残忍なカンビーズ⁽³³⁾はネズミ殺しを売っています。
肉付きのいいクセルクセス⁽³⁴⁾は黄ばんだ豚の皮を売り、
あんなに金持ちだったクレジュス⁽³⁵⁾は、あそこでは物乞いをしているんですよ。

(30) 冥界の楽園で、英雄や高潔な人物が死後に安楽な暮らしをする場所とされる。

(31) 以下で、博士は支配者たちや賢者たちの冥府での暮らしぶりを語り聞かせる。この場面は『パンタグリュエル』から着想を得ており、スカロンら同時代の作品にも類似の描写が見出せる他、ラプレーからさらに遡るとルキアノスの『死者の対話』にモチーフが求められる。ここでは、この世で権勢を極めていた者が嘲笑的となる一方で、つましい生活を送っていた学者が力を得ていることが諧謔的に描写されるが、これまでに博士がこの光景を見たことは言及されておらず、気絶している一瞬のうちに見た夢とも、即興のほら話とも取れる。いずれにしても、現世的な欲を諦め学問に専念するという選択の理由づけになっていると言える。

(32) アッシリアの伝説的な初代君主、ニヌス王。ニネヴェを創建したという。自軍の将校の妻であったセミラミスを奪って妻とした。

(33) カンピュセス2世。紀元前6世紀に君臨したアケメネス朝ペルシアの王で、エジプト征服を成し遂げたが、狂気じみた残虐行為や兄弟殺しが伝わっており、暴君であったとされる。

(34) クセルクセス1世。紀元前5世紀のアケメネス朝ペルシアの王。王位に就いて3年目に、まず大臣・高官を集めて180日間、次いで首都に住むすべての者を招いて7日間、大規模な酒宴を催したと旧約聖書『エステル記』に記されている。

(35) 紀元前6世紀に君臨したりディア最後の王、クロイソス。パクトロス川の河床が産出した砂金を用いて貨幣を鑄造し、巨万の富を有したため、その名は大金持ちを形容する語になった。

パンフィル

それは……

博士

ああ、それだけじゃありませんよ、ホラ吹きのパリッポ⁽³⁶⁾は痛くも辛くもないと言ってウオノメを引っこ抜いています、アレクサンドル大王は小鳥のようにさえずる女の子たちを追いかけ回し⁽³⁷⁾、用心深いセザール⁽³⁸⁾はマッチ売りをしています。

パンフィル

私が知りたいのはそんなことじゃありませんや。

博士

では何です？ あそこでは学者たちがしかと力を備えているかということですか？ 好奇心旺盛なおかたですね、すべて教えて差し上げねばなりませんな。それではお伝えしますが、今や、陰気なアナクシマンデル⁽³⁹⁾や、犬みたいなディオジェーヌ⁽⁴⁰⁾や、毛むくじゃらのエゾップ⁽⁴¹⁾や、

(36) 紀元前4世紀のマケドニア王、フィリッポス2世だと思われる。アレクサンドロス大王の父親にあたり、軍事・外交の優れた手腕によりマケドニアを急成長させたが、交渉により油断させた後に攻め入るというやり方をしばしば用い、二枚舌外交と揶揄されることも多かった。

(37) 「小鳥を巣から取り出す人」の意が転じて「女漁りが激しい男」や「放蕩者」を指す熟語的表現 (*dénicheur de fauvettes*) が動詞の形で用いられている。アレクサンドロス大王の遠征を戯画化した表現。

(38) ガイウス・ユリウス・カエサルは、終身独裁官となって約3ヶ月で、ブルトゥスをはじめとする独裁反対派の一味に暗殺された。

(39) 古代ギリシアの哲学者・天文学者アナクシマンデル。ラファエロの著名な画『アテナイの学堂』において前列左端に身を屈めているのがこの人物である。

(40) 古代ギリシアの哲学者ディオゲネスは、キュニコス（「犬のような」を意味するギリシア語）学派に属し、物を持たず大樽を住処にするなど反文明的な生活を送った。

(41) ギリシア語名アイソポス。主に動物を主人公として教訓を織り込んだイソップ寓話の作者として知られ、その容姿は醜く奇形であったと伝わる。

どもりのアリストット⁽⁴²⁾ や、がっちりしたプラトン⁽⁴³⁾ や、
飢えたエリール⁽⁴⁴⁾ や、去勢されたゼノクラット⁽⁴⁵⁾ や、
赤貧のエピクテット⁽⁴⁶⁾ や、寝取られたソクラット⁽⁴⁷⁾ は、
この世では大きな富も名声も得たためしかなかったけれども、
私が行ってきた国ではしたたかな領主ですよ。
ご満足ですか？

パンフィル

満足ですよ、
娘と結婚して婿になってくれさえすれば。

博士

言ったではありませんか、結婚などしないと？
これはプルトンの意向ですし、私の意向でもあるのですよ。

パンフィル

しかし……

博士

しかしプルトンがそうおっしゃったのですから、それで十分でしょう。

(42) アリストテレスは吃音であったという伝承が多くある他、アリストテレス自身も吃音に関して理論を打ち立てている。

(43) 背幅の広い屈強な体格を嘲笑的に表す形容詞 (râblé) の変形 (rablu) が用いられている。「プラトン」の呼称自体がギリシア語で「広い」を意味するあだ名であり、その体型を称して名付けられたともされる。(44) ヘレニズム時代のストア派の哲学者の中では最も無名なうちのひとり、ヘリロス。ストア派の異端者として非難され、孤立していた。

(45) プラトンに師事した哲学者のひとり、クセノクラテス。彼の二元論的な哲学では、天界を男性原理が支配するのに対し、女性原理が天下の万物を司るとされ、彼は後者を「正義」や「万物の魂」と呼んだ。

(46) 帝政ローマ期のストア派の哲学者エピクテトス。解放奴隷の出身で、生涯つましく暮らしたという。

(47) ソクラテスの妻クサンティッペは、プラトンをはじめとして後世から悪妻と評され、数々の逸話が残されているが、その人物像には大いに偏見・誇張が含まれると考えられる。ここでの姦通する妻としてのイメージは作者の創作である。

パンフィル

あなた、気が狂ってますや！

博士

何とでもおっしゃってください、

嘆いたとて罵ったとて無駄ですから、
私は結婚するほど気が狂ってはいないのでね。

(立ち去る。)

パンフィル

どうしたものか？

テルサンドル

テルサンドル氏に娘御との婚姻を許したまえ。

パンフィル

あの男にはあんまりひどい仕打ちをしたもんだから、もうそんなこと望めはせんよ。

イザベル

でももしあの人の気持ちが変わっていないなら、
彼と一緒にいることを認めてくださるかしら？

パンフィル

大喜びで。

テルサンドル（正体を明かす。)

テルサンドルならもう一度跪いてお嬢さんとの結婚を申し込ませていただきますよ。

パンフィル

娘はそなたのものだ、テルサンドルよ、そなたの愛に娘を引き渡そう。
しかしとんだ変わりっぷりには驚かされたよ、
家に来て話を聞かせておくれ。

三幕の喜劇の終わり

第四幕「クロランド」*Clorinde* 悲劇

担当：鈴木美穂

【**解題**】出典は、タッソ（Torquato Tasso, 1544-1595）作の空想的長編叙事詩『エルサレム解放』*Gerusalemme Liberata*（1581）である。第一次十字軍は、イスラム教徒に占拠されていたエルサレムを奪還するため、聖地を包囲した。この叙事詩は、両者の壮絶な攻防と、互いに敵対する者のあいだの様々な悲恋を豊潤な想像力で鮮烈に歌いあげ、絵画やオペラの題材を豊富に提供した、イタリア文学の傑作のひとつである。キノーはここで、キリスト教徒の勇士タンクレード（原作ではタンクレディ）の、イスラム教徒側の女戦士クロランド（同クロリダ）への絶望的な恋と、その悲劇的な顛末にスポットを当てた。

第四幕に登場する人物のうち、実在したのはタンクレードのみである。名門のノルマン人騎士で、1072年から1076年のあいだに南イタリアで生まれた。1096年、第一次十字軍に参加し、1099年にエルサレムを「解放」するまで大きな貢献をした。その後も故郷に帰還せず、アンティオキア公国（現在のトルコ南部の都市アンタキア）の摂政となり、1112年にその地で没した。

彼が恋する異教徒クロランドの出自にキノーは触れていないが、彼女の両親はエチオピアの王と王妃である。母は聖ジョルジュへの信仰厚く、騎士が竜からひとりの姫を救った絵画を日夜眺めていた。そして黒い肌の王妃が産んだのは、白い肌の王女だった。娘はすり替えられ、エジプトでイスラム教徒として育てられた。タッソの原作における死に臨んだクロランドの改宗は、この前提があつての調和的な“回収”である。しかしキノーは宗教的モチーフには深入りせず、クロランドは異教徒のまま最期を迎えている。

第三の人物エルミーヌ（原作ではエルミーニア）は、敵方の英雄タンクレードに報われない恋心を抱いているが、原作では本幕でのように面と向かって侮辱される場面はない。原作での彼女は、盗んだクロランドの武具を身につけたばかりに敵に追われて彷徨し、苦難を味わう。やがてタンクレードのためにキリスト教徒側に身を投じ、宿敵アルガンテとの死闘に勝利したが重傷を負った彼の傷を自らの髪を切って手当てしたのち、姿を消す。

本幕の最後、深手を負ったタンクレードは、心ならずも自ら斃してしまったクロランドの骸の傍らに倒れ伏す。原作では瀕死の身を味方の軍に救われ、その後も勇猛果敢な戦士としてエルサレムの解放に力を尽くす。しかしここでは彼の最後の台詞から、愛する人を追って息を引き取ったとも解釈でき、悲劇として完璧に幕を閉じている。

キノーは、先行し評価が高かったコルネイユ風の克己的悲劇を踏襲せず、プレッシャーな逆説を多用しつつ世紀後半に流行することになるロマネスクな悲劇を先取りして、十分に五幕の悲劇になりうる三者の物語を、要領よく一幕に仕立ててみせた。第四幕という、最終幕直前の幕で全体を緊張感をもって引き締めて、同じ出典をもつ、大団円の華々しい機械仕掛けの悲喜劇を準備し、かつ引き立てていると言えるだろう。

【**あらすじ**】エルサレムの城門の前、十字軍が聖地を包囲している。時は夜。キリスト教徒の騎士タ

ンクレードは、ふとした折に敵の女戦士クロランドを見初め、熱愛している。彼は機会を捕えて告白する。闘いと名誉のみを愛する乙女は、敵への愛は祖国への裏切り、そもそも愛は戦士の力を奪う、と冷淡に彼を退ける。彼女が城門から出たのは、敵の攻城用兵器である可動式の大櫓に火を放つためだったが、その作戦は失敗していた。

クロランドは男装した亡国の王女エルミーヌに遭遇する。王女は親友に、自らの情熱を打ち明ける。祖国シリアを征服したタンクレードの虜囚となりそして解放された時から、彼に心を奪われてしまったのだ。彼の心を確かめるために男装し、街を抜け出していた。クロランドは武具の交換を提案する。クロランドの鎧兜は特徴があるので彼の本心を探るのに役立つ、エルミーヌの鎧兜は目立たないのので作戦遂行に役立つ、と。

タンクレードは、エルミーヌをクロランドだと思って近づき、愛の言葉を投げかける。彼女はいつか有頂天になるが、すぐに間違いに気づく。それでも、エルミーヌを愛したことはなかったか、と執拗に詰め寄る。彼は端的にエルミーヌとの関りを語るが、それは彼女にとっては侮辱でしかない言葉だった。エルミーヌは激怒し、立ち去る。

当惑するタンクレードは、自軍の大櫓の炎上に気づく。さらに友人が敵の戦士に殺されるのを見る。その戦士こそクロランドだが、通常の武具を着用しているので彼には分らない。自力で切り抜けるべきだ、と彼女は正体を明かさず、二人の間で激しい戦いが始まる。互いに深い傷を与え合った果て、彼女の方がくずおれる。兜を脱がせた彼は、それがクロランドだと知る。彼女は息を引き取り、彼もその傍らに倒れる。

【第四幕の登場人物】

クロランド	Clorinde	女戦士
タンクレード	Tancrede	キリスト教徒の騎士
アルザス	Arsace	クロランドの側近
エルミーヌ	Hermine	アンティオキアの王女
アリモン	Arimon	タンクレードの友人
兵士たち		

舞台はエルサレムの城門の前

〈第1場〉 クロランド、タンクレード

クロランド（剣を手にし、飛び出してくる）

いかにも私がクロランド、無謀にも私を追おうとする者は
生に倦んでいれば、すぐにも満足させてやる。

タンクレード（クロランドに続いて登場）

ひとりで彼女を追いたい、誰も近づくな。

クロランド

そなたが誰であれ、死に急いでいると知るがいい。

タンクレード

そう、私の敗北は確かなもの、見事な女戦士よ、
あなたが常に不屈の戦士だったことは承知です。
私とその腕の猛攻をかわしえたとしても、
その麗しいまなざしの槍をかわすことはできないでしょう。

クロランド

私にそんな口を利くとは、いったい何者？

タンクレード

キリスト教徒です、タンクレードが私の名。
ゴドフロワ⁽¹⁾に導かれ、ここまでやって来ました、
この聖地を異教徒の王から解放するために。
やっと二か月も経つでしょうか、
森の中、泉のほとりで、
兜をとったあなたの姿を見かけ、恋するようになってから。
あっという間にあなたは去って行かれましたが。
今夜、この野営地に、あなたが現れるのを見て、
まずその武具であなただと思いました⁽²⁾。
今やその思いは揺るぎなく、
私はあなたを敵ではなく愛する者として追っているのです。

-
- (1) ゴドフロワ・ド・ブイヨン Godefroy de Bouillon (1058?-1100)。第一次十字軍の指揮官のひとり。死後英雄化され、武勲詩で歌われた。
- (2) タツソ『エルサレム解放』では、クロランドの白銀の鎧兜は磨き上げられており、兜には虎の印が打ち出されていた。「ましてや高名の虎が銀の兜の真中に浮き出て / 燦然と輝いているからには、誰もが眩くであろう、《あの女だ》と。」（『エルサレム解放』 鷲平京子訳、岩波文庫、2010、p.174）以後、この武具が重要な役割を果たす。

クロランド

敵であれ、愛する者であれ、どうでもよい。
そのどちらに対しても私の憎悪は等しく強い。
私は闘いしか愛していない、この高貴な職務は
それを遂行する者に、全き偉大な心を要求する。
愛はその反対だ、そのしまりのない柔弱さは、
それを感じる者の力を奪うばかり。
私は、だから、愛を嫌悪する。そして、愛の支配を憎むあまり、
愛する者は常に私には敵だ。

タンクレード

愛とはもともと無垢な熱情です。
愛の対象だけが愛を汚したり、清らかにしたりするのです。
わが愛の対象は高貴かつ優美、
私はつまりはあなたの中の徳と勇気を愛しているのです。
そしてあなたを愛している者に対して、おおつれない美女よ、
あなたが激しい憎しみしか持てないのなら、
私は怖れます、この心が恐怖で震えおののこうとも、
あなたの敵であるのをやめられないことを。

クロランド

その愛は私のいかなる好意も期待すべきではない。
二人の敵同士のあいだではいかなる交渉も罪だ。
そなたはゴドフロワを裏切ることなくして私を愛することはできない。
そして裏切り者の心など私にはふさわしくない。

タンクレード

ああ！私を信じるべきでないと思われているのはそのことなのですね。
あなたを愛しています、それは真実。しかし栄光も愛しています。
祖国のために死ねば、私の死は甘美でしょう、
あなたのために死んでも、同様に甘美なのです。

クロランド

その言葉が表している意味に私が目を止めれば、
私はそなたに大きな力を及ぼせることになる。

タンクレード

あなたにはすべてが可能。

あなたの望みは私にとって至上命令。

どのような証をお目にかければ？

クロランド

もう私を愛さないこと。

タンクレード

それは私のこのあり様では無理なこと。

愛を消滅させるのは愛の証明にはなりえません。

むしろ死に立ち向かえとご命令を。

私には全てが可能です、あなたを愛さないことを除いて。

クロランド

だがそなたの望みは何なのだ？ 知っているのか、私の魂は常に自由でありたいと思っていることを？

タンクレード

はい、しかしこうも知っています、姫、

我らの願いが常に適うわけではないこと、

しばしば人は意に反して愛してしまうことを。

私の望みはあなたの抵抗の上に成り立っています。

愛の神は自己防衛する者をことさらに愛します、

抵抗すればするほど、攻撃するのです。

クロランド

結構！ではさらに征服するために、私の方は闘いを避けることにする。

どこかで出くわすことのないように、

私は絶対にそなたの姿も、声も求めまい。

さらば。

タンクレード

どうかもう少し…行ってしまった、

夜の闇の中にもう姿を消してしまった。

近づいてくるのは誰だ？

〈第2場〉 アルザス、タンクレード

アルザス
おお天よ！

タンクレード
何を急いでいる？

言え、何を求めているのだ？

アルザス
クロランド様だ、わが女主人。
野営地が警報を発した、それで私は非常に懸念している
あの方が捕らえられたか殺されたのではないかと。
そして私は同じ危険を顧みず、
あの方がどうなったのかここに探りに来たのだ。

タンクレード
あの美女に仕える幸せを得ている者は誰であれ、
私がいるところでは身は安全だと知るべきだ。
クロランドは見事に姿を消してしまった。
彼女の後を追ひ、私が愛しているとだけ伝えてくれ。

アルザス
私に何を言えと？

タンクレード
今言っただろう、
行って、彼女に私が愛していると伝えるのだ、それだけでいい。

アルザス
野営地の方へ行ってしまった。市街地に戻ろう。
闇のおかげで今や撤退がしやすくなった。

不安は静めなければ。だがあれは
こちらにやって来るのは、武装した戦士ではないのか？
だが、間違った警戒心を抱いているのかもしれない、
輝く武具を纏ったクロランド様かもしれない。

〈第3場〉 クロランド、アルザス

クロランド

アルザスではないか！

アルザス

ああ、姫！そのように急いでどちらに？

クロランド

失敗した作戦をやり遂げに行く。
あの巨大な攻城機械⁽³⁾に火を放ちに行かねばならない、
あれによってキリスト教徒は我らに破滅をもたらしたのだ。
魔術師イスメーン⁽⁴⁾は、私の計画にうってつけの、
この手榴弾を作り、手渡してくれた。
しかし機会を逸した。何もできぬうちに、
キリスト教徒は私を防戦一方に追いやったのだ。
タンクレードが私のためを図ってくれなかったら、
彼らは数で、私を圧倒するところだった。
結局私は捕えられもせず無傷でいるのだから、
再びあの大胆な作戦に着手したいのだ。

アルザス

何と！また危険を冒しに行かれる、脱したばかりなのに！
姫、無謀な行為には災いがつきものです。

(3) 台車に乗せた可動式の高い櫓。城壁に横付けし、兵士を登らせて城内に送り込む。投石機、弩砲、破城槌などと共に中世の攻城用兵器のひとつだった。

(4) イスラム教徒側の大魔術師イズメーン

クロランド

そのような助言は今の私には無用だ。
幸運の女神は常に大胆な者に微笑む。

アルザス

よくお考えなさって…

クロランド

そなたの分別は私を止められぬ。
今は行動する時だ、考える時ではない。

アルザス

その企ては姫にとってあまりに危険です。

クロランド

そうだ、危険は大きい、が私の勇気ほど大きくない。

アルザス

しかしお命を落としかねません、敵に倒される可能性が。

クロランド

わかっている、死ぬかもしれない。だが私は震えていない。
物音がする。そこに行くのは誰？

〈第4場〉 エルミーヌ、クロランド、アルザス

エルミーヌ（傍白）

迷ってしまったようだわ、
私は……

クロランド

誰であれ、答えよ、さもないと命がないぞ。

エイコス XX

エルミーヌ

クロランドの声だわ、それに武具も彼女のもの。

クロランド

口をさくのだ。

エルミーヌ

わたしエルミーヌよ。

クロランド

おお！エルミーヌがこんな所に！

なぜ男装を？

エルミーヌ

思いもかけない不運のせい。

でも二人だけで話したいわ。

クロランド

離れていてください、アルザス。

エルミーヌ

すまないけれどアルザスに伝えさせてほしいの、今すぐタンクレードに、ある異国の男がここで彼を待っていると。

クロランド

アルザス、彼女の命令を聞きましたか？

アルザス

はい、姫。

クロランド

では命令を果たしに行きなさい。

(アルザス退場)

エルミーヌ

ここであなたと遭遇し、私たちの友情と考え合わせると、
中途半端な告白はできないわね。
知っての通り私の父はシリア王⁽⁵⁾ だった。
そして王位も命も共に失ってしまった。
あの時タンクレードが至る所に恐怖をもたらし、
宮殿に押し入って私を捕らえたのだった。
でも聞いてね、私を見て彼は勇者ぶってはいられなくなった、
私は囚われの女ではあったけれど、彼は私の奴隷になったの。
そして、征服者でありながら、自由を手放し、
ただ自らの心を縛るための鉄鎖を用意したのよ。
ついに、彼の愛の確かな証拠を私は得た、
愛の絆を示すため、彼は手ずから私の鎖を解いたの。
そして、私の望みを知り、それに抗うどころか、
この都まで私を送ってくれた。
私の心に愛が生まれたのはその時。
捕虜の身でなくなった時に、心が捕われたの。
タンクレードは、あの甘美な鎖を解くつもりで、
それを破壊するどころか、新たな鎖で私を繋いでしまった。

クロランド

何と！彼を愛していると？

エルミーヌ

愛しているわ、それで決意したの
ここで正体を知られずに、彼に話しかけよう、
彼の望みを探り、そして、彼が愛しているのが私だけなら、
彼に愛を誓って、彼に報いよう。

クロランド

そんな！じゃああなたは彼の信仰を何とも思わないと？

(5) エルミーヌは「アンティオキアの王女」となっている。アンティオキアは古代シリア王国の主要都市だった。現在のトルコ南部の小都市アンタキアの古称。

エルミーヌ

彼が信じているものはおぞましい。でも私は彼その人を愛している。

クロランド

エルミーヌ、よく考えて…

エルミーヌ

愛している時にはね、

クロランド、若い心は何も考えはしない。

クロランド

その尋常ではない企てに反対しても無駄だろうから、
とにかく、私たちの武具を交換しよう。
タンクレードが目にしたばかりの私の武具、
これをあなたが身につければ、彼を欺くことができよう。
そして、兜の眉庇を下げて、私の名を名乗れば、
彼が最初の恋に執着しているかどうかわかるだろう。

エルミーヌ

その提案、素晴らしいわ。

クロランド

私の望み通り事がうまく運べば、

それは私たち二人ともに、役に立つ。
あなたの武具は、ありふれているので、私を隠してくれるだろう
見られたら不都合な作戦なのだ。

エルミーヌ

誰かの足音が聞こえる。

クロランド

アルザスだ。

〈第5場〉 クロランド、エルミーヌ、アルザス

クロランド

タンクレードに会いましたか？

アルザス

はい、姫、私のあとから来られます。

クロランド

ここで待っているのは私だと彼は思っている？

アルザス

姫が危険にさらされていると思い、姫を守るためにやって来ます。
完全武装で、大急ぎで近づいて来られます。

クロランド

彼を引き留めて、そしてとりわけ、誤りに気づかせないように。

〈第6場〉 アルザス、タンクレード

アルザス

急いでやってくる足音が聞こえる。
殿、ここで、私の女主人にお会いになれます。

タンクレード

あの人に落ち合うためもっと急ごうではないか。

アルザス

あの方はまもなくここに来られます。
これ以上は進まないでください、クロランド様がそうお望みです：
それをあなた様に伝えるため、私はここに残っていたのです。

タンクレード

エイコス XX

わかった、従おう、これ以上は行くまい。
だがあの人は助けなど必要ないのではないか。

アルザス

殿、あの方の救助についてはご心配なきよう。
あの方は危機を脱して、ご懸念は無用です。

タンクレード

どうか、私に何も隠さないでいただきたい
あの方はどのような気持ちから私との会話を望まれているのか。
この愛の苦しみを増そうされているのかあるいは宥めようと？
何も言ってはくださらないのか？

アルザス

私は何もお伝えできないのです。
あの方だけが明かせる秘密です。
あの方です。失礼にならぬよう私はさがります。

〈第7場〉 タンクレード、エルミーヌ（クロランドの鎧兜を纏っている）

タンクレード

クロランドだ、近づこう。

エルミーヌ（傍白）

不安がつのも、
彼を目にして新たな乱れが心に生じる。

タンクレード

戻ってくださったのは嬉しい、魅惑のひとよ、
私にとって幸先がよいのか悪いのかわかりませんが。
ご好意をいただけるという思い上がりは毛頭ありません、
あなたを愛し眺めるのが望みの全て。
冷たくされても、私の望みは満たされます、
ここでこうしてあなたをお慕いしあなたを眺めていられるのですから。

エルミーヌ（傍白）

愛の言葉だわ！私が分かったのだわ！

タンクレード

私の最大の苦しみもあなたにお会いして癒されます。

エルミーヌ

でも私のことがお分かりですか？

タンクレード

はい、あなたは

その誇りにおいてまでも魅力を発揮する美女。
わかっています、天が我らのもとにあなたを送ったのは、
愛を与えるため愛を奪わないため、
そして天からと同様、自然からも授かった、
あなたの眼ほど生まれながらにして甘美なものはないことを。

エルミーヌ

人はしばしば外観に騙されてしまいます、
そして時には思いもかけず愛されることも。
希望をおもちなさい。

タンクレード

希望をもと！おお天よ！確かに聞いたのか？
幸せへの期待がより薄れたときに、幸せはいっそう増す。
私の心は、この素晴らしい恩恵に茫然となり、
あなたにっそう感謝しますが、その恩恵には益々値しなくなります。

エルミーヌ

誠実な恋人は愛されるに値します。

タンクレード

私の誠意にどんな疑惑が生じるのでしょうか？
あなたを愛する者は誰であれ不誠実ではられません、

クロランドを一目見ればクロランドしか愛せないのですから。

エルミーヌ

ではクロランドを愛していると？

タンクレード

お疑いになる？

これ以上高まることのできない熱情で愛しています。

彼女の美しさが消せない輝きなどは存在しないように、

私の恋の炎が上回れない愛などありません。

クロランドは並ぶものがありません、魅せられたタンクレードは

つまりは愛において、彼女が美において比類なきものである状態と同じです。

エルミーヌ

(傍白) その熱烈な言葉は私を魂まで傷つける。

(声を上げて) でもあなたは他の情熱を感じたことはないのですか？

タンクレード

これまで誰も制圧できなかった私の心が、

この世で恐るべき相手とするのはクロランドだけ。

クロランドの鉄鎖はあまりに輝きを放っているので、

そんな美しい鎖に値すると思うのは自惚れすぎというもの。

でも信じてください、クロランドはこの世でただひとり

私を鎖で縛ることのできる存在なのです。

エルミーヌ

(小声で) この不実な男はあくまでも私を絶望させる気ね！

(声を上げて) でもあなたはかつてエルミーヌに恋焦がれませんでしたか？

あなたが彼女を愛していたこと、私は聞きました。

タンクレード

それをあなたに知らせた人物は

本人が騙されたのか、あるいはあなたを騙したかったのでしょうか。

彼女を愛したことはありません。彼女がもっているなけなしの魅力も

私が会ったとき、涙に覆われてしまっていました。

そして、あまり苦しませてはならないと思い、

ただ憐れみから彼女への気配りをしました。

エルミーヌ

(傍白) これほどまでにひどい侮辱、いったい耐えられるもの？

(声を上げて) エルミーヌはあなたの愛の充分確かな証拠をもっています。

あなたの愛が囚われの身の彼女を解放しました、
あなたの恋の鎖のために、彼女は自由を得たのです。

タンクレード

私が彼女を何とも思っていないのはそのことから確かです。
もし愛していたら、彼女から離れたでしょうか？
あれほど冷たくあしらわずに、ひたすら願ったことでしょう、
私の愛、敬意、心遣いを受け入れてほしいと。
ですが彼女の気質がわずらわしく重苦しいと感じたので、
厄介払いをするために、もっともらしい口実を設けたのです。

エルミーヌ (小声で)

何てことを言うの、ああ天よ！何という侮辱！

タンクレード

そのつぶやきはどういうことですか、美しいひとよ？
ああ！おそらく私の榮譽はこの上ないものだということですね、
人が嫉妬していると思われるときは、愛している証になるのですから。
他にどう考えるべきなのでしょう？

エルミーヌ

そなたがひどい思い違いをしているということだ⁽⁶⁾。

死が忌み嫌われる以上に私はそなたを嫌悪する。
そなたは情け知らず、私の深い憎しみは、
そなたの卑劣なふるまい同様、匹敵するものを持たない。
そなたへの怒りは決して収まるはずはなく、
そなたを軽蔑しきっているので罰する気にもなれないということだ。
二度と会うまい。

(6) 怒りのあまり、エルミーヌは《tu》を使う。なお誇り高いクロランドはタンクレードに対して終始一貫《tu》である。

タンクレード

少なくとも抗弁をさせてください。

無慈悲な人は私を責めて姿を消した、私は当惑するばかり。

おお天よ！これ以上に予想外の不運があっただろうか！

道理が奪われたようだ。

こんな瞬時の変わりようはまさしく私に教えてくれる

愛の帝国には確実なものは何もない、と。

愛の神は善いことと悪いことを混ぜ合わせるのを好み、

さらに愛の神は子どもなのだから、全くの気まぐれだと。

彼のごく稀な恩恵も常に変わりやすいものだ。

だが、何ということだ！我らの大櫓が燃えているではないか？

〈第8場〉 アリモン、クロランド、タンクレード

アリモン

そうだ、危険な奴め！おまえの手から火が放たれるのを見たぞ。

逃げようとしてあれこれ画策してもたいした役には立つまい。

私の腕が、そのだいそれた行為を罰してやる。

クロランド

(彼を切りつけ) 私を脅す者にはこうしてやる。

アリモン

もうだめだ。

タンクレード (傍白)

アリモンが蒼白になって倒れた。

彼の不運を分け合うか復讐するかしなければ。

急いであの人殺しに接近しよう。

クロランド

(傍白) 私をつかまえようと、タンクレードが近づいてくる。

正体を明かせば、攻撃はしてこないだろう、

だが私は自分の腕だけでこの身を救いたい。
彼を待ち受け、動きを封じなければ。
(声を上げて) 言え、私の後をつけてくるのは何者だ！

タンクレード

私は戦士、正当な力の行使により、
そなたに、戦闘と死を、同時にもたらず者だ。

クロランド

戦闘を避けはしない、直ちに受け入れる。
だが死がそなたの側に留まるのは確実だと思え。

タンクレード

見せてやろう、容赦のない攻撃で、
約束した両方をしかと与えてやる。

(二人は闘う)

クロランド (傍白)

こんな奇妙な状況を意図した恋人がかつてあったらどうか！
(声を上げて) やられた。やり返さねば…

タンクレード

なんの、なんの、始まったばかりだ。

クロランド

とどめを刺すのは私の方だ。

タンクレード

ああ！天よ！やられた。

クロランド

なんの、なんの、私が受けた深刻な傷は
そなたの残りの血をさらに流出させることになるぞ。

タンクレード

おおそなた、対戦相手のそなたが誰であれ、
そなたの敗北なり私の最期なりを少しの間延ばしてくれ。
そして、我らの名誉がかかっているこの闘いで
願い事がまだ叶えられるものなら、
私の栄誉を高めるためもしくは不運を慰撫するために、
そなたの名と身分を教えてほしい。
私には分かりすぎるほど分かっている、この闘いで
最後は我々のうちひとりの命が犠牲になることが。
どちらかの命運が決まる前に知りたいのだ、
私の勝利にあるいは死に、栄誉を授けるのはどのような戦士なのか。

クロランド

そのような配慮はそなたにとって有利とは言えまい。
疑うな、私の名は恐るべきものだから、
それを告げれば、そなたがどう抗おうと、
たちどころに、そなたの手から武器が落ちるだろう。
だが私はそなたの弱さにつけ込みたくはない、十二分の勇気があるので、
優位な立場でそなたと闘いたくないのだ。
私の心が拠り所とできるのは勇気のみだ、
だから、そなたをいっそう征服するために、そなたを委縮させたくない。
防戦以外のことは気かけな。
私の攻撃から身を守れ、そしてただ知るがいい
あの大櫓が突然燃え出したのは
まさしくこの手が幸運にも為した業だ。

タンクレード

よく聞け、今の言葉でそなたに懲罰を与える気になった、
命と同様に高くつくことになるぞ。

(二人は闘いを再開する。)

クロランド

ああ！この一撃は致命的だ、力が失われてゆく。

タンクレード

よろめいているな、決着を急ごう。

勝ったぞ、倒れた。

クロランド

ああ！こんなことになるとは。

そなたは私を打ち負かしてはいない、私はまだ生きているのだから。

とどめを刺せ、そして知るがいい、この心が負けるとしても、

少なくとも、生きている限りは、負けることはなかったと。

タンクレード

友よ、むしろ勝利が奪われればよい、

これほど美しい命と引き換えにそれを得るよりも！

そなたの勇気に魂が奪われ、私の敵意は

正しい憐れみの矢で撃たれて打ち碎かれる。

敗者は私だ。

クロランド

その忌むべき憐れみは

そなたの攻撃よりも、不屈の私を屈服させる。

勝利はそなたのもの。そなたの度量は

そなたの意に関わらず、私の誇りを圧倒する。

屈辱的なこの運命だが、少なくともわからせてくれる、

その名に値する勝利者が与えられたのだと。

タンクレード

そなたが救われる望みはまだ残っているかもしれない。

この兜が邪魔だろう、とってやろう。

クロランド

私の傷は致命的だ、そなたには何もできない。

(タンクレードは彼女の兜をとる。)

タンクレード

何ということだ！クロランド！

クロランド

そう、死にゆくクロランドだ。

茫然としているな、タンクレード、私にはわかる
私が受けた致命傷はそなたをも同じくらい傷つけていると。
だがその苦痛は捨ててほしい、私には侮辱だ。
私の死は荣誉に満ちているので、悼むには当たらない。
私は死ぬ。しかし認めよう、この無慈悲な一撃は
これ以上見事な腕からはもたらされなかったと。
そうだ、私はタンクレードに敬意を捧げる、私の欺かれた魂は
私を動かさなかったら、彼に敬意を持つことはなかっただろう。
私の心は、そなたも運命も非難せず、
私の敗北と死について難なくそなたを許している。
残りの血が命と共に流れ去っていく。
私は死ぬ、だがそなたの敵として死ぬことはできない。
お別れだ。

タンクレード

クロランドが私の手にしているこの剣で死ぬ、
それなのに私の命は彼女の命と共に終わらない！
私の攻撃で、クロランドから光が奪われる、
それなのに私の死は彼女の死に続かない！
ついにクロランドが息絶える、それなのに私の裏切り者の心は
愛が足りないせいで苦しみによって死ぬこともできない！
何と！残忍な行為にはあのように素早かったこの手、
あの稀有な美女にあのようにむごいことをしたこの手は、
愛する人の死を早めてしまったのに、
まだ殺害者を罰しようとしていない、
正義の行為を為そうとしていない！
ああ！もうたくさんだ、一突きして自分を罰さなければ…。
しかし恋人たちが忌み嫌い人間たちが恐れおののく者、
その手をあれほど清純な血に浸したばかりの者が、
この上なく猛り狂った怒りを
この世で最も純潔で美しい胸にまで向け、
熱愛する美しい人を絶体絶命に追いやった後で、
その罰として一度しか死ねないとは！
いやいや、そのような血の犠牲で終わらせまい、
情け知らずのタンクレード、生き延びて最も過酷な責苦を受けるのだ。

熱愛したこの人をしかと見つめるがいい、
おまえの愛の高まりのさなかでおまえの手が惨殺したこの人を。
この美しい眼を見るのだ、おまえの初恋の炎を燃え立たせた眼を、
その眼の光をおまえの血生臭い攻撃が消してしまった。
よく見るのだ、かくも美しい傑作の残滓を、
そして、一瞥ごとに、新たな死を見出せ。
それからおまえ、お愛すべき手の最後の太刀による
傷口よ、この罪びとの出血を止めてくれ。
罪びとの運命を終結させるのは責苦を終わらせることだ、
死を与えることで、恩恵を施すことになってしまう。
しかし、何ということ！傷口が開く。願っても無駄なのか、
苦痛を長引かせるために、命を長らえさせることを。
この傷をつけたあの身体から流れ出た美しい血の復讐をするために、
傷口から私の血が急激に噴出する。
もう声が出ない、衰弱が加速する、
足元がぐらつき、目がかすんで見えない。
そして、最後の苦痛の力に屈し、
わが心臓は、吐息をついて、死を告げる。
あなた、いとしくそして痛ましい美の骸、
美しい亡骸よ、あなたに対し私の存在はかくも不幸をもたらすものだった、
許してください、命と共に私の罪を消失させることで、
死が愛に代わって私たちを結びつけるのを。

(彼はクロランドの遺体の傍らに倒れ伏す)

第四幕悲劇の終わり

第五幕「アルミードとルノー」 *Armide et Renaud* 機械仕掛けの悲喜劇

担当：野池恵子

【解題】 第五幕は機械仕掛けの悲喜劇（劇中劇）と粋劇からなる。劇中劇のさいごのジャンルは悲喜劇であるが、悲喜劇じたいは『ル・シッド』（1637年マレー座初演）以降、〈真実らしさ〉に反するということから衰退していたものの、機械仕掛けの方は1645年にプティ・ブルボン座で初演された音楽入りイタリア喜劇『偽の狂女』（*La Finta Pazza*, 台本ストロッチ E.Strozzi）をきっかけにパリの観客の人気を得て、以後マレー座でも仕掛け芝居が上演されるようになっていた。フロンドの乱（1648～53）などでマレー座が凋落し、新作が上演されなかった時期もあった中で、起死回生をは

かって提供された『芝居じゃない芝居』の劇中劇が仕掛け芝居で締めくくられたのは、当時のマレー座への人々の待望に答えていたと言える。

出典は四幕に続いて『解放されたエルサレム』（タツソ）である。「血と涙に覆われた土地」（前幕最終場）を魔法で逸楽の島に変えることで幕はあく。島が魔法のかけられた島であり、主人公がアルミードとルノーであることが、タツソから借用した大きなポイントである。恋に陥るまでのごく一部だけが取り上げられる。

ルノーは若いキリスト教徒の騎士であり、異教徒のアルミードに恋をしている。片思いの恋を嘆くのがこの幕のルノー側のテーマだ。魔術により与えられた恋人の小さな肖像画（虚像）を見ながら、恋人（現実）を思い、恋をしてくれない以上現実のアルミードは画のアルミードと変わらないことにいらだつ。彼はそのまま海神たちの歌を聞いてまどろみ、夢想から醒めることがない。愛の思いは恋人の虚実入りまざった姿をめぐり夢うつつのまま終わる。キューピッドに運ばれた時も彼は言葉は一言も発さない。

一方アルミードは捕虜の騎士たちをルノーが解放したのに怒り、ルノーに対し復讐の念に燃えているが、愛神アムールの矢にあたって以後、怒りの激情が少しずつ愛の激情に変わっていく。その変化の過程が逐一言葉で報告される。魔法にかかり両思いになった二人は誰も知らない未知の世界で生きることになる。

機械仕掛けを用いて、目の楽しみが多く用意される。幕があくと、宙づりのアルミードが上から降りてくる姿を観客は目撃する。花で覆われた島が突然目の前に現れる。彼女の呼びかけで、地面が割れて中から亡霊がでてくる。立派な橋が渡ろうとしたとたん砕ける。川の流れる草原くさはらが広がり、川底から半人半魚のトリトンとシレーヌが現れて歌をうたう、愛神アムールが空中に現れ、空中でアルミードとやりあったあと矢を放つ、キューピッド4人が上から現れて、アルミードとルノーを連れ去る。一幕の間にこれだけの場面転換があるとスペクタクルを楽しみにして来た観客は大喜びだったはずだ。機械はすでに以前の公演で使用されていたので、彼らは同じ機械仕掛けの過去の芝居を思いだして拍手喝采していてもおかしくはない。『芝居じゃない芝居』の観客は、機械仕掛けを通じて、他の日の観客につながりマレー座の現実を生きている。

この幕には、耳の楽しみもある。前記のトリトンらの歌だ。アレキサンドランの中に2連仕立てで異なる音綴の歌詞が組み込まれている。一連は4音綴1行・8音綴4行・4音綴1行で成り立ち、それが繰り返されて2連になっている。音楽は今後新しいジャンルの発展につながる当時の人々の楽しみであった。

最終場の枠劇に入ると、王侯貴族が舞台上で観劇した当時の習慣にならって、舞台の端に置かれた椅子に座していた商人役のラ・フルールは、ラ・ロック（マレー座の座長でもある）に導かれて、舞台中央に出る。実名で登場している俳優ジョドレ、オートロシュ、シュヴァリエ、ラ・フルールは全員マレー座の座員である。1655年4月の当該劇団との契約に名がある⁽¹⁾。

ラ・フルールは、劇中劇が一幕での約束通り「気品があり優美」（最終場）であったのに満足し、国王に気にいられさえすれば、国王の武勇がこの世の果てまで続く以上、芝居も同じように限りな

く続くと言い、ルイ 14 世の賛美で終える。

マレー座と粹劇の現実がすでに渾然一体となっていたが、そのさらに外側にルイ 14 世の世界が喚起されて劇の空間は外の社会に広がっていく。

【あらすじ】 魔女アルミードが宙づりで登場、荒地を花の島に変える。彼女はキリスト教徒の騎士ルノーが回教徒側の捕虜を解放したことに怒り、師で伯父のイドラオに復讐の手助けを頼む。亡霊イドラオは言われた通り、ルノーとの出会いの場を用意すべく、ルノーひとりを魔法の島に渡らせる。ルノーは、島で川辺の草原^{くさはら}に横たわり、手に持たされたアルミードの肖像画をみつめる。彼はアルミードに恋をしているが、現実のアルミードも絵の彼女と同様に恋を知らないと嘆く。トリトンとシレーヌが川底から浮き出て愛の歌をうたうと、ルノーは魅了されてまどろむ。アルミードが現れて神たちを水底に戻し、ルノーの復讐をすると宣言する。持っていた投槍でルノーを突き刺そうとしたころ、愛神アムールが宙に現れてそれを遮る。愛を嫌悪するアルミードに愛神アムールは一本の矢を命中させ、飛び去る。一方アルミードは復讐への激情に燃えて、槍の一撃をルノーに与えようとするが、その激情は愛の熱情に変わっていくのに気づく。彼女は愛神アムールに敗北を認め、二人を愛神アムールの支配する国に運び去るよう哀願する。

舞台の端で観劇していた父親は、芝居の出来を称賛、3 組の結婚を許し祝す。この劇団が将来国王から寵愛を受け、国王の未来も劇場の未来も際限のないものになろうと予言する。

【五幕の登場人物】

アルミード	Armide	魔女、ルノーの敵
亡霊	L'Ombre	アルミードの伯父の亡霊
ルノー	Renaud	キリスト教徒の騎士、アルミードに恋している。
アジス	Agis	ルノーの侍臣
トリトン	Triton	半人半魚の海神
シレーヌ	Sirène	半人半魚の海の精
愛神アムール ⁽²⁾	L'Amour	
4 人のキューピッドたち	Quatre petits Amours	

舞台はエルサレム近くの魔法の島

〈第 1 場〉 アルミード

アルミード (宙づりで)

(1) S.Wilma Deierkauf-Holsboer: *Le Théâtre du Marais II* Nizet 1958 p.82

(2) オペラ関係ではとくに「愛の神」と訳されるが、ここでは実際の登場人物なので愛神アムールとした。

配下の者たちよ、お前たちの働きは私にとっては最強の武器に相当する、
悪魔たちよ、魔法によって私に仕えさせられている者たち、
血と涙に覆われたこの場所を
快い花々に覆われた島に変えなさい。

(舞台は逸楽の島にかわり、立派な橋がこちらとつなぐ。同時にアルミードは地上に降りたち話しつづける。)

そして、魔術について多くの知識を与えてくださったあなたよ
学問のなかでもっとも確かで高尚な魔術についての知識を、
海を好きな時にかきたて鎮めて、
天空を青ざめさせ、地獄を震えさせる魔術についての知識を。
イドラオの高貴な霊よ、ミルテ⁽³⁾の暗い灌木のもとで
亡霊たちが味わう休息を味わっていらっしゃいますね、
離れてくださいその陰気な岸辺を、私の仇をうってください、
生者たちを痛めつけるために、死者たちは置き去りにください。

40人の騎士たちを私はようやくのこと

キリスト教徒の中から手にいれて、鎖につなげましたが、
人びとのなかでもっとも勇敢な若きルノーによって、
私の手中にあった騎士たちが、何憚れることなく奪われました。
私は復讐を切望し、私の気持ちをその思いで奮いたたせませす、
女の気持ちにとってこれほど気分のよいことはありません、
女が無力を理由にたやすく侮辱されればされるほど、
その仕返しができることの甘美さはひとしおなのです。
ですから、私はあなたに懇願いたします、私にとって大切な亡霊よ、
全地獄が崇めるスチュクス川⁽⁴⁾にかけて、
女神ヘカテの月の循環とその三種の異なる呼び名⁽⁵⁾にかけて、
そして悪魔の王の黒い三叉の矛にかけて、
ルノーの命とともに挑むために
地中の中からただちに出てきてくださいと。

(地面が割れてイドラオの亡霊が出てくる)

(3) ミルテは和名ギンバイカ。古代より愛欲の神ヴェニユスの神木とされ、愛の象徴とされた。ここでは亡霊のイメージとともに使われて愛が死の装いをまとっている。

(4) 冥界を流れる川

(5) ヘカテは月の女神、とくに新月を象徴する。三種の呼び名とは新月、満月、欠けつつある月

〈第2場〉 イドラオの亡霊 アルミード

亡霊

ごらんの通り、アルミードよ、準備は整っている、お前の望みに従おう、
地獄は、私とともにお前の不幸を分かち持つ。
地獄も怖れているのだ、ルノーの比類ない勇気が
地獄の全信奉者に致命傷を負わせるのではないかと、
あの若いキリスト教徒については間違いなくこう言える
恐怖を地獄の中まで持ち込んだのだと。
だが悪魔たちは、結局はみなお前と示し合わせて
やつの失墜とお前の復讐を早めよう。

アルミード

侮辱は私だけに与えられた、ですから
復讐の任にも、私だけであたらなければ。
ルノーは罰せられるでしょう、それも私の武器で罰せられるのです、
あの人との出会いは、私が魔法をかけて待っている好機です。
彼に出会ったあとは、私の手だけが実際のところ、
彼の手による間違いを、正さなければなりません。

亡霊

その考えは正しい、それに私はお前に伝えに来ている
たった今、ルノーがこの場所にやってくるだろうと、
お前の怒りが彼に恐怖を与えるなどとはとんでもない、
彼は、お前と近付きになりたいという、お前と同じ願いを持っているのだと。

アルミード

同じ願いを、あれほど侮辱した私と同じ？

亡霊

彼は同じ願いを持ってはいるが、同じ考えをではない。
お前は彼を破滅させようとしているが、彼はお前を手にいれようとしている、
お前は彼の心臓を突き刺したいのに、彼は心をお前にさしだしたい。
彼はお前へのはかり知れない情熱にとりつかれている。
私は、お前の肖像画が彼の手に入るようにした、

彼の若く激情でたぎりたつ心は、すぐに恋でもえあがった、
だがその炎が照らすのは、彼の死だけにちがいない。

アルミード

あの男の愛の情熱は私をいためつけます。死は彼を喜ばせるにちがいません、
その死が愛神アムールの力で愛しく思う女性の手によるのならば。
私の憎悪は彼が死ぬば、人の目には明らかにならないでしょう、
彼は死ぬでしょう、私の手にかかって。彼は死ぬでしょう、でも満足して。
私は彼の死を切望します、それもむごい死を。
彼は罰せられずに死ぬことになり、苦しみに死ねば。
死は人を罰することにはなりません、死に魅力があるかぎりは、
彼が罰を受けずに死ぬのなら、私は仇を討ったことにはならないのです。

亡霊

とはいえ彼が死にさえすれば、お前はそれで充分なはずだ、
死はあらゆる悪の中でも最後の最悪のものだ、
人がどのように侮辱されたと感じるにしても、
自らの敵をなきものにすれば、復讐をしたことになる。

アルミード

ルノーが現れたわ。さあうまく仕掛けて
従者を伴わずにこの島に渡って来させてください、
ここは、私の復讐にとってはまさにうってつけの場所なのです。

亡霊

お前の満足のいくようにしてやろう。だが決して姿を現してはならんぞ。
(アルミードは木立の陰に姿を隠す、一方亡霊は橋を渡り、舞台前面に出る。そこにルノーが彼の側
近とともに現れる。)

〈第3場〉 ルノー、アジス、亡霊

ルノー（手に肖像画の小箱を持っている。）

やめだ⁽⁶⁾、アジス、勝ち目のない恋の炎に立ち向かうのは、
炎は消したいが、それは私には不可能だ。
どのように考えてみても、今はその時期ではない、
私の感覚は乱れに乱れて、理性の働きをおさえる。
アルミードは異教徒だ、アルミードは罪深い、
彼女はつまりは私の敵なのだ、だが彼女は美しい、
彼女の欠点は、彼女の強烈な魅力で隠されている、
それなのに私の理性が見るのは、ただ私の感覚が目にしたものだけ。
やめだ⁽⁷⁾、この人っ子ひとりいない中、お前の話で
私の心の甘美な愛の気がかりを乱すのは。
恋の思いにかられて私はここまでやってきた、
その思いは、私をこれから支えるのに十分なものを与えてくれるだろう。
神よ、この島はなんと美しく、またこの橋はなんと立派なのか！
あの土地の男に、その秘密をきいてみよう。
この島は何であろうか、おーい？

亡霊

その問いかけから判断しますに、
旦那さま、あなたさまは余所からの方ですね。
アジアにはここ以上に有名な島はありませんので、
異邦の方でもこの島への来訪は、けっして拒まれてはおりません。
あなたさまのお心もちが少しでも目新しいものをお好みになるなら、
ここの美しさをご覧にならずして通りすぎることはございませんな。

ルノー（橋を渡る）

私に続いてこい、アジスよ。

亡霊（アジスを止めて）

もしお前が生きるのに憂いたというのでないなら、

(6) 原文は2人称単数の命令形

(7) ここの原文は2人称単数の命令形

お前がどんなやつであれ、とどまれ、あの男の後に続くな、
この島には魔法がかかっている、そしてその厳しい縛りによって
二人の人間が同時に橋を渡ると必ず危険な目にあうのだ。

アジス

かまうものか。
(アジスは渡ろうとして橋に足をかけようとしたとたん、橋が砕ける)

ああ天よ！橋は突然消えてしまった、
このひどい結果をみると私は動揺しはじめる、
これは魔力のあらわれにちがいない。
かけた張本人はどうか私の目の前に現れてほしい。

亡霊

私だ、それは。何を前は望んでいるのか？

アジス

私が何を望んでいるかだって、悪党！
お前を殺すか、私を何としても主人のもとに行かせるかだ。

亡霊

なんと、非力な人間よ、私を脅すというのか、
お前なのか、私の一息でお前など打ち倒すことができるというのに。
そうさ、橋を壊して下に落としたのは私の仕業だ、
渡るのをルノーだけに許したが、
知っておけ、結局のところ彼⁽⁸⁾の力次第だろう
彼が生から死へ移行するのはな。

アジス

お前の術を怖れるからと言って、私がここにとどまることはない、
お前の死のほうが、少なくとも彼の死よりも先になろう。
(彼は手に剣を持ち、それで亡霊を打とうとすると、刃は地面にめりこみ、アジスは空をきっただけ
となる)

(8) 1657年版はお前の (ton) だが、60年版は彼の (son) になっている。意味から考えて「彼の」を採用した。

天よ、これほどの驚異が人々の口の端に上るのを聞いたことがあつたらうか！
私は剣で打ちつけるが、どの振りも空を切るばかり、
魔法の力は驚くべきもの、彼の姿を消してしまったのだ。
さあ、探そう、ご主人さまと落ちあえる場所を。

〈第4場〉 ルノー

ルノー（魔法の島にて）

水がやさしく口づけをしにくるそこの草原は、
私にここでしばし物思いにふけるよう誘っているようだ。
（彼は草原に横たわる。）

うっとりする島よ、愛すべき神ゼフィロスが
女神フロールの胸の中で悩ましげにため息をつく、
あまたの魅力がやどる場所、魅惑の川が
次々にゆったりと抱擁しては囲んでいく場所、
喜びを完璧で堅固なものにするために、
アルミードがもしここにいるならば、不足するものは何もないだろうに。
愛にあらたに魅せられた結果か、
この肖像画を見ないと、美しいものを見るのがなくなる。

（彼はアルミードの肖像画をみつめる。）

技芸がその甘美なまやかしによって
自然の造形したもっとも美しい顔立ちを見せてくれる傑作よ、
私に用意された災いのまさに原因よ、
あなたは崇拜されるに相応しい魅力をお持ちだ、
アルミードが持つ美しいところを、肖像画のあなたもともにお持ちだ。
でも何なのだ？ あなたは結局絵でしかない、
私があなたの中に見いだすものは、私のあたりまえの願いに反して、
にせものの幸福でしかなく、それは私を幸せにはしない。
私の目にはあなたの顔立ちがあなたをアルミードと思わせる。
だがアルミードは恋ができるが、あなたは恋はできない！
あなたは恋はできない？ そう、大切な肖像画よ！
いやいや可能だ、あなたは肖像画のなかで、より彼女に似ているからだ。
私はほとんど希望を持ってない、もっともな怖れを感じるだけだ
アルミードは絵のあなたと同じに私の嘆きには耳を貸さないだろうと思えるのだ、

それに怒りが怖ろしいあの美女は
私にとっては、絵のあなたと同じに恋を感じてくれる人間にはならないだろうと思う。
おや、いったい誰のせいで、突然水がどよめくのだろう？
トリトンがシレーヌをともなって川からでてきた。
二人とも歌をうたおうとしているようだ。
二人の企てには驚かされる、聞かなくてはなるまい。

〈第5場〉 トリトン、シレーヌ、ルノー

トリトンとシレーヌ（歌う。）

愛さなければならない
それは不可避の運命なのだ、
愛に屈しない心などない
愛神アムールが魅了できない心などは。
何よりも人が愛にふさわしい時は、
愛さなければならない。

ルノー

私の感覚はこの心地良い音楽にすみずみまで魅了される
眠気に身をゆだねるようにせまられ、押し倒される。
（ルノーは眠りこみ、トリトンとシレーヌは歌い続ける。）

トリトンとシレーヌ

何という喜びの数々を、
愛神アムールは味わわせるのだろう、人をその鎖につないで！
そのひどくつれない仕打ちは
官能のため息をつかせる、
その病がひきおこすものは苦しみではない
喜びなのだ。

〈第6場〉 アルミード、ルノー

アルミード

さあ、お二方ともお下がりください、ルノーが寝入っています、
私は人の助けなしで、この敵の命を奪いたいです。

(トリトンとシレーヌは水に潜りアルミードは話しつづける。)

今ここの不屈の心を持つ男は
怒れる女の剣に打たれて死ななければならない。
最期の時がやってきた、ルノーは命を落とさなければならない、
この男は目をまだこれから開けるであろうが、それは彼が自分の死ぬのを見るためだ、
彼の眠りは、この危機の頂点においては、
眠りというより、死そのものなのだ。
私たちの感覚をこの上ない楽しみで、満たそう
怒り狂った人々に復讐が抱かせる楽しみで。
私は一人の恋する男を亡き者にしようとしている、無駄なことだ、私の怒りから
あまりにも罪深いこの男の愛が、私の絵姿を守っても、
彼の心臓を傷つけないというだけではすまない、私は自分の心臓をつき刺しめし、
私の攻撃が彼の胸まで達するのを万が一にもあの男に遮られるならば。
そこまで致命的な苦痛はない
嫌悪する人から愛されているのがわかることほど。
愛神アムールはいつも哀れませたいのだ。
私の生きがいのすべてが復讐することにあるので、
あの男の愛は私にとっては新たな侮辱でしかない、
彼の愛は、私からどうしても復讐を取り上げたいのだから。
私のほうは、二重に復讐をすることができる、
ルノーに罰を与えれば、愛神を罰することにもなるだろう。
あの不実な男の心の中の、愛の王国を破壊しよう！
二人への恨みを晴らそう……

(彼女は腕をあげて、手にしていた投槍でルノーを突き刺そうとすると、愛神が空中に現れる)

〈第7場〉 愛神アムール、アルミード

愛神アムール

やめよ、やめよ、アルミードよ！

アルミード

いったいあなたは何者か？ 私の願望をさえぎるとは？

愛神アムール

私は混乱の息子にして、快樂の父である、
私こそが、その限りない、豊穡を生む力をもって
天界やこの世界に存続するものを支えているのだ。
私は自然界に活気を与える、自分のことをもう少しうまく紹介するなら、
私は恋をさせる神だと、言おう。

アルミード

いったいどんな権利があつて、私の復讐を妨害しようとするのか、
あなたの力など、たいてい度外視していたのに？
人に恋をさせる神とはいえ、矢を放って、
恋を知らない者に恋をするよう仕向けることまではできまい。

愛神アムール

おまえがこれまでまったく恋をしたことがなかったにしても、それでもお前は恋をすることができる、
お前の心の中で私の炎は、お前の好悪にかかわらず、燃え上がることがある。
生命の泉は、私の愛の炎の実現なのだ。
生きとし生けるすべての肉体を私は意のままに動かすことができる。
一人の人間の心は無関心のさなかに置き去りにすることがあっても、
そこで不足しているのは私の願望であり力ではない。
そろそろお前も私の掟にしたがう時がきた、
おまえは、ルノーと私に復讐を果たしたかった、
それで私は、お前を懲らしめようといきりたち、
ルノーと私の帝国をお前から守るためにやってきた。

アルミード

何？ ここまできて私が復讐するのをやめさせたいのか？

愛神アムール

そうだ、お前の苦悩のなかでもいちばんささやかなことだ、
私はお前を罰するのに、厳しい責め苦を与えることでなしたい
お前の敵を、お前が愛するようにさせたい。

アルミード

私が！あの男を愛する！そのようなむなしい思いは捨てなさい、
あなたの全力が発揮されるのは、こちらの意向による。
あなたに勝つためには、自分の身を守ろうと欲するだけでいい、
愛を手に入れるのは、それを手にいれたいと思う分量だけだ。
あなたの厳しい命令が私の心に課されてはいるが
私は、それらの命令以上のことをすることができる、
ルノーに対し、気持ちが揺らぐことがないどころか、
私は復讐しなければならぬし、あなたの目前で彼は死ななければならない。

愛神アムール

この矢はお前に罰を与えるだろう、あの男の命を助けることで、
お前は知ることになるだろう、愛神にとって不可能なものはないとな。
(神は彼女にむけて一本の矢を放ち、飛び去る。)

〈第8場〉 アルミード、ルノー

アルミード（胸にささった矢を抜きながら）

ああ、ただこれはかすり傷だ、この程度では
ルノーを私の怒りの矢から守ることはできない、
それにたとえ私がそれで命を落とすことになろうとも、運命を嘆きはしない、
私には彼の死を見届けるにたる命は残っている。

ルノー（夢をみながら）

私はあなたに狙われても逃げはしない、いいや……

アルミード

彼は夢をみている。

ルノー

なんとつれない！

あなたに憎まれながら生きることなど、決してできません、
死なざるをえなくなった今、私はむしろ受け入れたい
あなたのお手による死を、絶望の末の死ではなく！

アルミード

もし私の手がお前を死なせることで、お前の期待に答えることができるなら、
お前は喜んで死に、私は満足して生きることだろう。
この一撃を受けなさい…… ああ！ 突然体に震えがきて
同時に心臓と手がふるえる！
何という衝動が不安なこの心の中で、立ちあがるのか
私が突き動かされている激怒の流れに抗して、
何という魔力が、私の魔法よりも強く、私の衝動を意に反してかきたてるのか？
何ということ？ 私は敵とここに共にいることをよしとしているのだろうか、
それに、私の憎悪は倍加するどころか、減少しているのか？
憎悪をかきたてた人物が、今はしずめるのに役立つだけ、
私をいらだたせていたことが、私の心をほぐし始めた。
どうしてだろう、私の感覚が薄情にも反発して
ルノーのためを思い私の憎悪を抑えようとするとは、
それにどうしてなのか、私の目が狂気じみた欲望にさからって、
彼をじっと見守るとは、それも喜びを感じながら？
喜びを感じながらだって！ 私の目はつまりそのような侮辱を与えるのかあなたたちに対して、
復讐と激怒の激しい発作よ
あなたたちは妨げないのか、私の心の案内人である目が
私たちの敵の姿を苦痛もなく恐怖ももたずに見ることを？
ああ！胸をしめつけるこの嘆きを聞かせても無駄だろうか、
今にも消えかけようとする私の激怒の無力な残滓に向けて！
怒りはすべて消滅して、意気地なしの私の心で
感じられるのは弱さのみ、もう熱情は感じない！
もう熱情はない！ 私はなにを言っているのか？ 偽っても無駄だ
たしかに強い熱情に私はさらに燃えているのを感じる、
でもああ！私を燃やすこの熱情は今度は
もう私の憎悪から生じているのではない、愛からきているのだ。
ルノー、あなたの力は、私の魔力よりも強い、

あなたはアルミードに勝利した、彼女はあなたに兜を脱いだ。
どんな危難もあなたには恐怖を与えないはずだ、
復讐で激昂した女に勝利できたのだから。
恥ずかしいことに、あなたの栄光が増していき、
あなたの敵がついにはあなたの恋人になるのを感じる。
愛神が私を罰し、優しい対応をやめる、
私は愛の心をいだき、神は私の怒りを引きうけた、
そして不思議な心の変化が即座に効果をあらわして、
復讐するかわりに私は恋をし、愛神は復讐をはたす。
愛神の復讐はしかしながら不完全だ
それは神が、私の気に入らなくはない矢で私を罰したという点でだ。
私は愛神の鎖を受けて以来自分の自由を憎んでいる
愛神が私を苦しめるものを喜びとする。
愛神の苦痛はすべて私たちの心をいつも魅了する、
その罰が甘美であるなら、その甘美さはどれほどのものか？
もしあなたの正義と、愛神アムールよ、あなたの力が同じなら、
あなたの怒りを私の侮辱とともに終わらせなさい。
私の罪はあなたの与えた恋の炎で、償われた、
私を罰したからには、少なくとも私の望みをかなえなさい。
私の残りの生涯をあなたにささげたい、
私の心はもう他の楽しみを欲することはない。
私たち二人を運び去りあなたの掟のもとで暮らせるようにしてほしい、
あなた以外のものには禁じられた場所で。

(愛神アムールが4人のキューピッドを従えて空中に現れる。)

〈第9場〉 愛神アムール、アルミード、ルノー、4人のキューピッド

愛神アムール

お前の望みはかなえられた、私は準備ができていぞ、アルミード、
未知なる世界で、お前の案内役をはたそう。
お前たち、私に従う喜びの神々よ、
愛のキューピッドたち、二人の恋人を私の導きにしたがって運びさつてくれ。

(4人のキューピッドたちは地上に降りたち、2人がルノーを、あとの2人がアルミードをかかえて、愛神アムールのあとを追って2人を運ぶ。)

〈第10場〉 最終場 ラ・フルール、ラ・ロック

ラ・フルール

(二幕から座っていたくつろぎの場所からでてくる。)

娘が死んだ、何ということ！

ラ・ロック (彼に近づきながら)

お嬢さまはまもなく降りてきますよ、
それをご覧になれば、連れ去られたことにさほど驚かされないに違いありません。

ラ・フルール

このような結果に、みなは驚かされるかもしれない。

ラ・ロック

つまるところ、我々の試演にご満足いただけましたのでしょうか？

ラ・フルール

はい、どなたもそれぞれの人物をうまく演じていらっしゃいました。
皆さんの3組の結婚に私は喜んで賛同します。
これまでの試演において皆さんの芝居は、気品があり優美に見えました、
そのような幸運は、羨まれるに違いありませんね、
この劇団がいつの日か名誉なことに
太陽がその陽を照らしたいそう尊厳に満ちた国王陛下、
比類なき陛下から好評を得たときには。
陛下はきわめて偉大な国王たちが個別に所有していたものをひとりで同時にお持ちになり、
絶え間なくその武勇を示し、
世界の果てまで、その行く手は遮られないのです。

機械仕掛けの悲喜劇と五幕最終幕の終わり